

声を救う

——アタナシオス書簡集の起源について——

橋 川 裕 之

要 旨

コンスタンティノープル総主教アタナシオス1世（在位1289-93、1303-9年）の書簡集はなぜ、今日まで伝わるような形であるのか。本稿の主たる目的はアタナシオスの書簡集の複数の起源を探り、彼自身の生を含め、書簡集の成立を可能にした歴史的諸条件を明らかにすることである。具体的に注目されるのは、14世紀前半に匿名の写字生によって制作され、もっとも多くの書簡を収録するヴァティカン・ギリシャ語写本2219番の二つの「変則」である。一つは、この写本にはアタナシオスの最初の在位期に由来することが明らかな書簡は1通しか含まれていないこと、もう一つは、この例外的な1通は別の記述史料をもとに作成された偽書の可能性があることである。本稿はこの二つの変則が、アタナシオスのオリジナル書簡における差異、すなわち、アタナシオスが手元に残した写しと受け手に送られた現物の差異に発していること、そして、彼が1297年の政治的事件を機に自らの「書かれた声」の力を認識し、送付する書簡の写しを作り始めたことを明らかにする。

Save the Voice: On the Origins of Athanasios' Letter Collection

Hiroyuki HASHIKAWA

Abstract

Why are the letter collections of Patriarch Athanasios I of Constantinople (1289–93, 1303–9) extant in the form that we know today? The chief aim of this paper is to trace the multiple origins of his letter collection manuscripts and elucidate the historical conditions that enabled their creation, including his life. In particular, we note two anomalies in Codex Vaticanus Graecus 2219, the manuscript copied by anonymous scribes during the early fourteenth century, which contains the largest sample of his letters: (1) In this manuscript, there is only one letter that appears to have originated during his first patriarchate; (2) this exceptional letter is suspected (by Albert Failler) to be a forgery due to comparisons that have been made between it and another source (the historical narrative of Georgios Pachymeres). This paper shows that these anomalies stem from the formal difference between the original letters of Athanasios; in other words, the difference between the actual letters delivered to recipients and the duplicates that he preserved suggests that Athanasios began duplicating his letters after a political affair in 1297 (the accidental discovery of his letter of excommunication hidden on a column in the Great Church) that made him recognize the power of his “written voice.”

はじめに——書簡集なるジャンルとテキスト

書簡集 (letter collection) なるテキストはなぜあるのかと問われたとき、人はなんと答えるであろうか。ある人は唐突な問いかけに戸惑いながらこう答えるかもしれない。書簡集なるジャンルがあるから、と。簡略に過ぎるとはいえ、これは注意深い回答の一つといえよう。確かに、書簡集なるジャンルはプラトンがソクラテスやその他の人の口を介して説くアイデアのように、書簡集なるテキストの存在を可能にしているからである。それでは書簡集なるジャンルはなぜあるのか。このさらなる問いかけに対しては、おそらく、ある社会において文字および書簡があったからというより、文字の使用されたある社会において、何者かが、作者なりテーマなりの共通性を有する複数の書簡に価値を見だし、それらを集成しようと欲するのみならずそれを実際に行い、同時代および後代の人々に一定の影響を与えたから、と答えるのが適切であろう。これは現在形というよりはむしろ過去形で答えるべき、つまりは歴史にかかわる問いである。

書簡集なるジャンルの歴史に関しては、古代ギリシャにいくつかの興味深い証拠を見出すことができる⁽¹⁾。古代ギリシャにおける現存する最古かつ真正の書簡集と一般にみなされているのは、プラトンとイソクラテスという、いずれもソクラテスより数世代若い職業的教師のそれである⁽²⁾。周知のとおり、ソクラテスは書かなかったが、彼の弟子たちや彼と交友を持った人たちは精力的に書いた⁽³⁾。プラトンはソクラテスの衣鉢を継ぐ哲学者として、イソクラテスはソフィスト的弁論家として、他の作品とともに書簡も書いた。この2人の卓越した言葉 (ロゴス) の使い手の書簡集が今日まで伝わっているという事実と、彼ら以前の人物の真正の書簡集は現存しないという通説は、書簡集なるジャンルないしアイデアがギリシャ世界においては文筆行為 (ロゴグラフィア) と密接なつながりを持っていたことを示唆する。現存しないアリストテレスの書簡集の編者であると、『様式論』の著者デメトリオスによって伝えられるアルテモンなる人物によれば、「書簡は対話 (ディアロゴス) と同じ方式で書かれるべき」であった。なぜなら、「書簡は対話の別の面のようなものであるから」⁽⁴⁾。アリストテレス書簡集へのアルテモンの序文を参照しつつ、彼の言葉を引用したと思

われるデメトリオスは、アリストテレスとプラトンの書簡のスタイルの相違について言及し、次のようにいう。「語り方と同じく、書簡の長さも適切でなければならない。長過ぎるもの、そして表現の気取ったものは実のところ書簡 (エピストライ) ではなく、誰々へ挨拶するという見出しのある著作 (シュングランマタ) なのである。プラトンの多く〔の書簡〕やトゥキュディデスの〔一書簡〕がまさしくそうであるように」⁽⁵⁾。このアルテモンとデメトリオスなる人物が書いた時期については、アリストテレス死後の紀元前3世紀初頭から紀元後1世紀までの諸説があり、いまだ確固たる学説は存在しないように思われるが、デメトリオスが書いた時代までに、プラトンの書簡集のようなテキストが成立して一定の読者を得ていたこと、そして書簡集を作るという慣行がギリシャ世界内である程度広まっていたことが彼の記述からわかる。

こうして少なくとも前4世紀以降に成立したと思われる書簡集なるジャンルないしテキストに、書簡の作者自身はどのように関与したのか⁽⁶⁾。書簡集なる明確なアイデアがあるとすれば、建材と労働によってアイデアたるデザインの実現を図る建築家のように、書簡の作者も書簡集の作成に関与してもよさそうなものである。たとえば、プラトンには書簡集なるアイデアはあったのか、彼は自らの書簡集をデザインしたのか。この問題に関連して、山本光雄は次のように述べている。

書簡は本来その宛名人に渡されるべきものである。もし渡されたとすれば、差出人の手元にはないはずである。したがってそれが一つの書簡集として成立するためには、ふたたび宛名人から返してもらわなければならない。またそれが返してもらえるためには、宛名人のもとに幸いその書簡か、あるいは写しかが保存されていなければならない。またそれが宛名人のもとに保存されるためには、それが保存されるだけの理由がなくてはならない。(中略)

さらにまた以上のことと関連して、多くの異なった人々に出された書簡を収集したのは誰であったかという問題も起こってくる。しかしこの問題についてもただ想像するの他はない。それはプラトン自身によってか、他の弟子たちによってかであろうが、これは書簡集というもの

の一般的な性質から考えれば、後者の場合が真実に近いように思われる⁽⁷⁾。

プラトンの書簡集をめぐる不明な点の多さに、山本は「書簡集というものの一般的な性質」をもとに、プラトンの書簡はもしそれが受け手から回収されたとすれば、回収の主体はプラトン自身ではなく、その弟子たちであったと推論している。山本は「書簡集というものの一般的な性質」を明示してはいないけれども、彼が、書簡集が書簡およびその書き手を高く評価する何者かによって、教師の書簡が対象の場合はその弟子によって、編纂されることを一般的と考えていることは明らかである。山本の推論が該当するであろう古代ギリシャの別の書簡集は、失われたアリストテレスのそれである。アリストテレスの書簡集は現存するその講義録とともに、彼の思想を継承する逍遥学派の人々によって編纂された可能性が高い。ただし、この場合も、彼の書簡がどのような方法で集成されたのかはわからない。アリストテレスは送付する書簡の写しを残していたのかもしれないし、弟子たちが送付先から書簡の現物ないし写しを回収したのかもしれない。また、アリストテレスの意図自体も不明である。我々がかりうじて推測できるのは、遅くに生まれたアリストテレスのほうが、プラトンよりも書簡集を明確にイメージしたことである。というのも、書簡集のアイデアは書簡執筆の普及および著名な書簡の書き手の登場とともに明確になるはずだからである。

ギリシャ語書簡集の発展期といえる時期にあって、プラトンやアリストテレスといった人々が自らの書簡集をどのようにイメージしていたかは不明に留まるが、彼らより数世紀後には、それを明確に意識していた人物がローマ世界に登場する。それはキケロである。彼の書簡は914通が現存しており、それらはキケロの死後、宛先ごとに集成され、書物として刊行されたものである。そうした事業を物理的に可能にしたのは、彼が自らの秘書のティロに命じて管理させていたアーカイヴと、彼から400通を超える書簡を受け取った友人アッティクスのアーカイヴである⁽⁸⁾。キケロは生きてそれを目にすることはできなかったが、その他のおびただしい著述と同様に、自らの書簡を書物にまとめて刊行し、後世に残すべき作品とみなしていたのである。キケロはその著述の中で、大カトーと、グラックス兄弟の母

コルネリアの書簡集に言及しており、書簡集というジャンルは紀元前2世紀後半までにローマ社会で成立していたことがわかる。また、当時のローマの教養人がのきなみギリシャ文化を愛好していたことを考慮すれば、ラテン語の書簡集はすでにあるギリシャ語の書簡集をモデルに成立したことが推測される。

書簡の書き手その人が書簡集の作成を意図したことの最初のはっきりした証拠が、ギリシャ世界ではなく、ローマ世界にあることは興味深い。真理を探究するに際して直接の対話を重んじて、何も書き残さなかったソクラテスとは異なり、ローマの文人たちは演説の原稿やその他の作品を積極的に書き、そしてそれらを書物として刊行することによって、その現世での地位を高め、その名を後世に残そうと努めたからである。この点でソクラテス的な哲学者というよりは明確にローマの伝統的な政治家であったキケロの希望は、帝政期の官僚、小プリニウスに受け継がれた。『博物誌』の著者である大プリニウスを叔父に持ち、トラヤヌス帝治下に属州ビティニアの行政長官を務めた小プリニウスは、紀元2世紀の初頭に、おそらくはキケロの書簡集をモデルとして、そして1人の友人に促され、自身の書簡集を断続的に刊行し始めた。彼は明らかにその刊行によって、ソクラテスがアテナイで教えたような仕方ですらに配慮したのではなく、ローマの政治家および文人としての名、過去の英雄や賢者たちのそのように数百年、数千年のときを越えうる名に配慮したのであった。

キケロや小プリニウスの試みには、修辞学の広範な流行というローマ世界特有の背景があった。書簡もそれに含まれるが、朗読を前提とするテキストを巧みに書くことは、ローマの政治家や一部の教師らの主要な関心の一つであり、そうした彼らの世界にあっては、美しい言葉からなるテキストは書物として刊行され、それに価値を認める人々の手に行き渡るべきであった。この文脈で重要なのは、ローマ世界において、キケロや小プリニウスといった、優れた弁論家ないし修辞学者であることを自負する人々を中心に、自らの書簡集を自らの手で刊行するという新たな慣行が現れたと思われることである。彼らにとって、友人に送ったり友人から受け取ったりする書簡は、彼らの日常生活と交友関係の証であるのみならず、彼らの書く技術の巧みさの証でもあり、

文学的な観点からも教育的な観点からも刊行に十分値するものであった。つまり、修辞学が政治家や文人にとって習得不可欠の科目となったローマ世界では、書簡集は修辞学的ないし文学的な鑑賞に堪えるべき作品となったのであり、小プリニウスのように、書簡の作者その人が書簡集の編者でもあることは異例ではなくなったのである⁽⁹⁾。

けれども、ローマ帝国における書簡集の刊行は、地中海東方から始まった新たな宗教運動のため、キケロ的な自意識の持ち主の独壇場とはならなかった。というのは、新興のキリスト教徒たちは紀元2世紀に、ローマの伝統的知識人とは異なる理由から、独自の書簡集を編纂し、それを彼らの正典の中に組み込んだからである。いうまでもなく、それは新約聖書の後半に収録された、パウロらを作者とする一連の書簡である。周知のとおり、イエスは書かなかった（ソクラテスの場合と同様、彼が生涯何も書かなかったという意味ではない）。ソクラテスの弟子たちは彼が死んだ後、彼の言行や思い出を積極的に書き始めたが、イエスの直接の弟子たちは当初、彼について書くことに消極的であったと思われる。一二使徒たちはイエスの死後、プラトンやクセノフォンがソクラテスについて書いたようにはイエスについて書かなかった。新約聖書の前半に置かれた四つの福音書はいずれも1世紀後半から2世紀初頭にかけて成立したと一般に考えられており、使徒たちがそれらを書いた可能性はほとんどない。これは、ガリラヤ出身の彼らがプラトンやクセノフォンのような教養人でなかったからというよりは、彼らとその共同体において、何も書かなかったイエスにならい、口頭でのコミュニケーションを重んじたからであろう⁽¹⁰⁾。少なくともイエスの教えの伝承に関しては、文字ではなく、声による直接の交わりが重んじられたと思しき新興の共同体に、かつて彼らの迫害者であったパウロが一石を投じた。小アジア南東部のタルソス出身で、ギリシャ語の使用者でもあった彼は、ある時期から、彼がそうすることが必要と感じた各地の教会へ長文の書簡を送り始めた。彼の書簡執筆について、タイセンは次のように述べる。「原始キリスト教における手紙記述は一つの危機の産物だった。パウロの伝道活動の最初のほぼ20年間については一つの手紙も保存されていないから、彼はその後初めて伝道と教会指導の道具としての手紙を発見したわけである」⁽¹¹⁾。正確に言えば、

パウロが伝道の当初に書簡を書いたか否かは不明に留まるであろうが、何らかの事件を機に彼が書簡の有用性を認識し、それを積極的に用い始めたことは十分ありうる。タイセンは、現存するパウロの書簡はすべて、彼が紀元49年にアンティオキア教会から分離し、小アジアやギリシャを中心とする地域で独自の伝道を開始した後に書かれたものとみなしている。広範な地域に伝道する以上、口頭での交わりのみで諸教会への影響を維持することは困難であり、彼はおそらく当時の教会指導者の慣例に反し、書簡を自らの声を再現する素材として積極的に用い始めたのであろう。そのように考えると、書簡における彼の語調が当時の弁論家たちのそれよりもはるかに切迫し、ラディカルでもあることの理由が容易に理解できる。特定の教会が彼の望むような状態に留まるかどうかは、彼が書簡で届ける声の力にかかっていたのである⁽¹²⁾。

パウロがキケロや小プリニウスのように、自らの書簡の写しを残していたかどうか、自らの書簡集を想像していたかどうかは確たる答えの下しえない問いである。確実なのは、彼が、今日我々が目にするような形での書簡集をまったく想像していなかったことである。というのは、彼が活動した時代にはいまだ福音書は成立していなかったし、キリスト教徒の共同体の中心にはエルサレム教会があったため、彼の異邦人伝道はあくまで周縁的な活動でしかなかったからである。エルサレム教会が存続していれば、彼の書簡は異なる運命をたどったかもしれない。紀元70年のローマ軍によるエルサレムの占領と神殿の破壊は、ローマで殉教を遂げたパウロの地位を相対的に押し上げる機能を果たした。なぜなら、エルサレム教会という従来を中心が事実上消滅したことで、異邦人の信者が共同体の中心を占めるようになったからである。この中心の喪失は、福音書文学とともに新約聖書そのものの成立を促した。新約聖書の編纂は、紀元2世紀半ばに独自の正典を編纂した神学者マルキオンに対抗する形で行われた。マルキオンの正典はルカによる福音書と10通のパウロ書簡からなり、その後、マルキオンは教会会議において破門されたが、彼によって最初に集成されたとしきパウロ書簡は、その他の文書とともに新たな正典に組み込まれた。こうして小プリニウスによる書簡集の刊行から約半世紀後に、ギリシャ語で書かれ、小プリニウスのそれとはまったく

性質の異なる、キリスト教の書簡集が出現したのである。

パウロの書簡がすでにそうであるように、キリスト教は地中海世界におけるギリシャ文化とユダヤ文化の遭遇の一面を体現するものであり、ローマ帝国の既存の文化や慣行とある程度まで共存することが可能であった。これは書簡執筆の分野でもそうであり、ローマ帝国がキリスト教化し、帝国の重心が西方から東方へ移動した後も、パウロ的な書簡集が、修辞学の意義に裏打ちされたローマ的な書簡集を駆逐することはなかった。これに関して興味深いのは、東ローマないしビザンティン帝国においては、書き手がのきなみキリスト教徒となったにもかかわらず、ローマ的な、すなわち、書き手がその文学的価値を強く意識するタイプの書簡集が、主流であり続けたことである。『オックスフォード・ビザンティウム辞典』の「epistolography」の項目にはこうある。「それら〔ビザンティンの書簡〕はほとんどつねに刊行が意図されていた。公衆の閲読という意味で、あるいは、集成の回覧を通じて。一部の書簡集は著者の残した控えから作られ、別のものは後の編者によって受け手から集められた。明らかに、多くの著者（たとえば、ヨアニス・ゼジス）は集成を刊行する前に、その書簡を再整理し編集した」¹³。この引用は、項目冒頭の一文の引用によってより明確となるであろう。「エピストログラフィー、あるいは書簡執筆の技法、修辞学と同種のビザンティン文学の一ジャンル、知的エリートに人気」¹⁴。つまり、この記事によるならば、ビザンティンの一般的な書簡集はラテン語で書かれた小プリニウスのそれに似通っており、そのうえ、少なくとも書簡執筆の分野においては、キリスト教徒ではなかった古代ローマの知的エリートとすべてキリスト教徒であったビザンティンの知的エリートの心性も似通っていたことになる。

そのことを如実に示すのは、キプロス出身の学者ゲオルギオス、別名、総主教グリゴリオス2世（在位1283-9年）の自伝である。これはグリゴリオスが総主教辞任後に、彼自身の「書物（ピュクティス）」の序文として書いたものである。彼はそこで修辞学者および文筆家としての自負を隠そうとしない。「その諸著述に関して、著者が模倣と称賛に値する何かを達成できたとすれば、この著作は吟味を望む人々に供されるであろう。かくして私は今、手

元にある書物を名指す」¹⁵。その記述によれば、彼は高等教育を受け始めた当初、アリストテレス哲学に熱中したせいで修辞学と文筆（演説作成）の習得に苦心し、他の学生たちから揶揄されるほどであったが、やがて本腰を入れてそれらを学び、彼らを黙らせることに成功したという。彼の修辞学上の達成を証すべき書物が、彼の書簡集を含むものであったことは疑いない。というのも、彼の自伝のテキストは、14世紀前半に、現存しないアーキタイプ（原本）から別個に制作されたと推測されている書簡集の2写本に含まれているからである。ところが奇妙なことに、彼の演説文は書簡集とは異なり、集成としては残っていないし、自伝には書簡集への言及もない。ウィリアム・ラミアはグリゴリオスの書簡集の性質と彼の意図について次のようにコメントしている。「この書簡集はその著者によって用意され、年代順に分類された。けれどもそれは、おそらく不意の死の訪れにより、完成のための時間を持たなかった。キプロスのグリゴリオスは完全な著作集の刊行を構想していた。彼はその書簡集をそれに含めることに決めた。その自伝はこの全集の序文となるはずであった。おそらくはそこから、完全な著作集も書簡集もその生前には現れなかったことが推論される」¹⁶。

グリゴリオスは1289年6月に総主教位を退いて程なく、隠退先の修道院で没した¹⁷。自伝には自らの重い病への言及もあることから、彼は退位後、死を予感しつつ作業を進めていたのかもしれない。というのも、彼は自伝において、自らの著述の少なさを読み手に向けて釈明しているからである。彼が希望するレベルの教育を受けられるようになったのは比較的遅かったし、長らく貧しい境遇にあったために、必要な書物はすべて自身の書写によって入手しなければならなかった。総主教になることを強いられてからは、次々と発生する教会の深刻な問題への対応に忙殺され、さらに種々の病に悩まされ、価値ある著述を多く生み出すことはできなかった。彼は率直に告白する、「そして彼〔グリゴリオス〕は仕方なく書くことを止めた」と¹⁸。この先も精力的に書くことを予定していれば、この種の釈明は不要であったはずである。彼は、一冊の書物を自らの生のモニュメントとして後世に残すつもりだったのである。実のところ、グリゴリオスが「完全な著作集の刊行」を意図していたのかどうかはわからない。

自伝には神学や教義の問題への具体的言及が一切なく、彼はその書物を修辞学的なテキストのみで構成し、神学的な著述は除外するつもりであったように思われる。いずれにせよ、彼が当時の知的エリートの人として、書簡の執筆を修辞学的な実践とみなしていたこと、そして、将来の書簡集の編纂と刊行に備えて、書簡の控えを手元に残していたことは疑いない。

ビザンティン帝国では古代以来の修辞学と弁論の伝統が生きており、帝国の聖俗のヒエラルキーで栄達を遂げようと望む者は、若きグリゴリオスやその学友たちのように、声に出して読まれるべきテキストの書き方を習得しなければならなかった¹⁹⁾。すでに述べたように、帝国の知的エリートにとっては、演説と書簡執筆はともに修辞学的かつ政治的な実践であり、それゆえ、それらのテキストは入念な保管と刊行に値したのである。演説の場合、演説者はたいてい自らが作成した原稿を公的な場で読み上げたので、その原稿は演説者の手元に残ったであろうが、書簡執筆の場合は、二千年以上前にデメトリオスが指摘しているように、書き手が記入したテキストは受け手へ送付され、そして贈与された²⁰⁾。したがって、書簡の修辞学的ないし文学的価値に自覚的な書き手ないし送り手は、より確実にテキストを保存するために、贈与されるテキストの写しを必要としたのである。送られた書簡は声を運ぶメディアであると同時に贈り物でもあり、送付された後は、それは受け手の私有物となるからである。受け手はそれを保管するかもしれないし、しないかもしれない。たとえその修辞学的な価値を認めたとしても、彼ないし彼女が贈り物たる書簡を保管するとは限らない。

グリゴリオスの書簡集は自伝的な序文をとともなうという点で異例のテキストではあるが、その他の点、とりわけ書簡の作者自身が集成の刊行を意図したという点で、当時の標準的な書簡集の枠組みの内にある。ビザンティン帝国ではとりわけ11世紀後半より後、大部な書簡集が数多く編纂され、今日まで伝わっている。実際、ほとんどの著者はグリゴリオスのように、コンスタンティノーブル、もしくはそれに次ぐ大都市で高等教育を受けた知的エリートであった。彼らによる書簡集の編纂と刊行が帝国における修辞学の再流行ともいえるべき現象に関連していたことは、同じ時期に、皇帝への称賛演説（パネ

ギュリコスないしエウロギア）などの演説テキストが多く書かれたことから示唆される。皇帝および総主教の経済的後援をしばしば受けたという点でも、言葉の巧みさに徹底してこだわったという点でも、彼らはソクラテス的な哲学的伝統の継承者というよりはむしろ、古代ローマの知的エリートの、さらに遡行すれば古代ギリシャのソフィストの遺産の継承者であった。その修辞学的技量への自信を考慮すれば、彼らの書簡集の主たる起源が彼ら自身の意志ないし構想（アイデア）であったことは当然といえる。ラミアがグリゴリオスの書簡集について推測しているように、あるいはケケロのそれが現にそうであったように、書簡集の一部は著者の存命中には刊行されなかった。けれどもその場合も、著者が書簡集の存命中の刊行を前提として、送受する書簡を注意深く管理したことは疑いなく、起源は著者自身の意志に求められる。

それでは、グリゴリオスの同時代人にして彼の後任総主教となったアタナシオス（在位1289-93年、1303-9年）の書簡集についてはどうか。アタナシオスの書簡集の起源も、グリゴリオスのそれと同様、知的エリートとしての自意識に求められるのであろうか。誰かが以上の問いを不意に口にしたとき、我々は即座に否と答えることができる。根拠は、アタナシオスは明らかに当時の知的エリートではなかったことである。彼の初期のキャリアはグリゴリオスのそれとある点では似ている。アタナシオスはアドリアノーブル、グリゴリオスはキプロスと、両者はともに帝国の周縁地域に生まれ育ち、ともに少年期により高次の学びを求めて郷里を離れた。出生の時期は前者が1230年頃、後者が1240年頃と推測されているので、両者は文字通り同時代人である。決定的に異なるのは、求めた学びの内容である。聖人伝によれば、アタナシオスは幼少期に読んだ聖アリピオス伝に触発され、修道士として生きることに関心し、最初に叔父のいるテサロニキの修道院で修練士となり、髭の生える年齢になるとアトス山に赴いて本格的な修道生活を開始し、1280年代前半にコンスタンティノーブルに定着するまで小アジアやバルカンの山岳地帯の修道院を渡り歩いた。一方、すでに簡単に触れたように、グリゴリオスは修道生活ではなく伝統的な高等教育を志向し、ラテン人支配下のキプロスからギリシャ語の高等教育が存続する小アジアに単身で渡り、自らを受け入れてくれる

優れた教師を求めて各地を旅し、最終的にはコンスタンティノーブルで著名な学者ゲオルギオス・アクロポリティスに師事した。両者は、ビザンティンの文化的伝統にひとときわ忠実である一方で、まったく異なる世界でのエリートないし勝者となることを目指していた。禁欲者としての成就が追求される世界では、修辞学や弁論のスキルが特別な価値を持たなかったことはいまでもなく、アタナシオスの書簡集の起源は、知的エリートの自意識とは別のものに求めなければならない。

では、アタナシオスの書簡集はなぜあるのか。彼は帝国の知的エリートや修辞学の達人というには程遠い存在であったにもかかわらず、アタナシオスの書簡集と呼ぶにふさわしいテキストが現存するのはなぜなのか。たとえば、その現存する最古の写本、ヴァティカン・ギリシャ語写本 2219 番 (Codex Vaticanus Graecus 2219; 以下、V と略) は、その 274 のフォリオすべてが彼に関連する書簡から構成され、「我らが聖なる父コンスタンティノーブル総主教アタナシオスの、皇帝とその他の人々に宛てられた、その大いなる神的熱意を顕示する書簡」⁽²¹⁾ という表題を持つ、つまり、アタナシオスの書簡集を制作するという何者かの意志が反映された、一冊の書物である。なぜこのような書物があるのか。アタナシオスはグリゴリオスのように自らの書簡集の編集と刊行を意図したのか、それとも意図しなかったのか。彼は自らの書簡の控えを残したのか、それとも残さなかったのか。もし彼が書簡の控えを残していたのなら、何が彼にそうした知識人的な慣行を選択させたのか。

一つの重要な手がかりは彼の職務にある。彼はその生涯の後半、コンスタンティノーブル総主教に二度任じられ、弟子の修道士のみならず、ビザンティン教会全体を指導する責務を担った。そもそも彼が総主教に任じられていなければその書簡集は存在しなかったと思われる点で、その職務の意味は無視できない。ヘルベルト・フンガーはビザンティンの書簡を、職務的書簡 (Amtliche Briefe)、純粋な私信 (Reine Privatbriefe)、文学的書簡 (Literarische Briefe)、文学的私信 (Literarische Privatbriefe) の四種に区分し、アタナシオスの書簡集を総主教ニコラオス 1 世ミスティコス (在位 901-6 年、912-25 年) のそれとともに職務的書簡に分類している⁽²²⁾。フンガーによれば、職務的書簡は「実際の用途で書かれ、役所

ないし役人に宛てられた。当初は刊行のことは考えられていなかった」⁽²³⁾。国家および教会の要職を担うのはたいてい知的エリートであったことから、「ミハイル・プセロスやキプロスのグリゴリオスやその他のビザンティン人は職務的書簡を、彼ら自身が用意した書簡集に収録した」⁽²⁴⁾。

確かに、アタナシオスの書簡集は彼が総主教として書いた職務的書簡がその大半を占めており、フンガーによるこの分類は一見、アタナシオスの書簡集の起源への十分な説明を与えるように思われる。著者の在任中ないし生前は集成の刊行が想定されていなかった職務的書簡は、著者の周囲にいる秘書的役人が、書かれるたびに逐一書写していたのかもしれないし、著者の辞任後ないし死後、集成の使命を帯びた同様の役人が受け手から書簡を回収していたのかもしれない。けれども、大部な書簡集の伝わるビザンティン時代のコンスタンティノーブル総主教はごく少数に留まることから、総主教の作成する書簡を管理、編集する持続的制度は帝国に存在しなかった可能性が高い。

この問題についてはグリゴリオスとアタナシオスの書簡集の比較も有効である。グリゴリオスの書簡集には彼が総主教在位中に書いた書簡とともに、就任以前に書いた書簡も多く含まれており、この事実は、総主教座にアーカイブ的機能が備わっていたというより、むしろ、彼が自らの書簡の写しを保存する従来の習慣を、総主教就任後も維持したことを強く示唆する。他方、アタナシオスは知的エリートのそれとはまったく異質の書簡を精力的に書く総主教であったため、総主教座の役人が特別に彼の書簡を集成したという推測も不可能ではないが、V およびその他の主要な集成に、彼の最初の在位に由来する書簡はほとんど、そして在位以前の書簡はまったく含まれていないという事実は、彼が総主教に就任した後、グリゴリオスやその他の知的エリートと同様、自らの意志で書簡の写しを保存するようになったことを示唆する。このように考えるとき、当然、問題となるのは彼がそうした理由である。

アタナシオスの書簡集はなぜ今日まで伝わるような形であるのかという、これまで誰も明確には発さなかった問いへの答えを探ること、アタナシオスの書簡集の起源をアタナシオス自身の生の中に求め、ビザンティンの書簡文化の多様性あるいは反修辞学的伝統の存続を示すこと。以上が我々の具体的な目

標である。

第1章 書簡写本のステマ

最初に、アタナシオス書簡集の起源についての考察の準備作業として、ヨーロッパ・地中海各地の図書館に散在する主要な写本の基本的情報を把握する必要がある。これまでアタナシオスの書簡写本の伝来プロセスを検討し、いわゆるステマ（系統）の再構成を試みたのは、いずれもアタナシオスの書簡の校訂者の、アリス・メアリ・タルボットとマノリス・パテダキスである²⁵⁾。

タルボットは1975年に刊行した批判校訂版への序文において、ヨーロッパの図書館に現存する収録書簡の多い4写本（括弧内は略号）、すなわち、V、パリ補遺・ギリシャ語写本516番（Parisinus Suppl. gr. 516 = S）、ナポリ・ギリシャ語写本II B 26番（Neapolitanus gr. II B 26 = N）、パリ・ギリシャ語写本137番（Parisinus gr. 137 = P）の関係を具体的に検討している（図1）²⁶⁾。

彼女は、4写本の中で、もっとも多くの書簡を収録するVを14世紀前半の制作物とみなし、これが現存しない原型（プロトタイプないしアーキタイプ）にもっとも近い写本と位置づけている。彼女の推測では、Vはアタナシオスの没後、その弟子たちによって制作された。アタナシオスは1309年の二度目の総主教辞任の後、遅くとも1323年までにコンスタンティノープル市内で没した。その後、彼の弟子の3人が、たんなる「歴史資料 historical record」としてではなく、「靈感を与える読書 inspirational reading」の素材として、書簡集を作成した。収録された書簡のうち2通は文面が途切れ、末尾を欠いていることから、オリジナルはさして保存状態のよくない個別の書面であったと彼女は推測している²⁷⁾。

この「一次写本」Vから派生したのが、「二次写本」S、N、Pである。Sは計329フォリオのうち

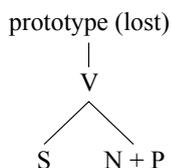


図1 タルボットによるステマ
(Talbot, *The Correspondence*, xl)

136フォリオをアタナシオスの書簡が占める大部な写本である。Nは、タルボット版の書簡1番から15番途中までを、Pは同版の15番途中から115番までを含む写本である。当初は一写本に収録されるはずであったフォリオが何らかの理由によって分割され、NとPに組み込まれたことは明らかである。これらの写本は、Vの第一部（1フォリオから89フォリオまでのおもに皇帝を宛先とする書簡群=Vi）の書簡を多く含み、第二部（93フォリオから99フォリオ=Vii）および第三部（100フォリオから274フォリオ=Viii）の書簡をほとんど含まない。タルボットは写本に施された透かしや筆跡をもとに、これら3写本の書簡はいずれも16世紀初頭ないし中葉のイタリアで、1人のギリシャ人写字生の手でVから転写されたと推測している²⁸⁾。

タルボットは彼女が刊行したViの書簡を多く含む写本に限定してステマを構成しているが、パテダキスはViに収録されていない、つまりは未刊行の書簡を含む写本をも考察対象に含め、より包括的なステマを提示している。V、S、N、P以外で彼が検討したおもな写本とその略号は以下のとおりである。アレクサンドリア・ギリシャ語写本288番（Alexandrinus gr. 288 = A; ff. 145-280v）、ヴァチカン・オットボニ・ギリシャ語写本93番（Vaticanus Ottoboni gr. 93 = B）、ヴァチカン・ギリシャ語写本856番（Vaticanus gr. 856 = T）、シナイ・ギリシャ語写本42番（Sinaiticus gr. 42 = Si; ff. 31v-32v）、パリ・ギリシャ語写本1351A番（Parisinus gr. 1351A = X）、そして1934年の火災で焼失したメガスピレオン修道院ギリシャ語写本62番（Mega Spelaion, ms. gr. 62 = m）（図2）²⁹⁾。

X、Tは15世紀、Bは17世紀に制作された写本で、それぞれ2通から5通の書簡（アタナシオスが1304年の教会会議で草案を作成した新法ネアラム）を含んでいる³⁰⁾。パテダキスは写本中の誤字のヴァリエーションを判別したうえで、BとXはS、N、Pと同様、Vから、TはXから派生したと結論づけている³¹⁾。

Siは、タルボットがViの校訂時にその存在を認識していなかった写本である³²⁾。これに含まれるアタナシオスの書簡は、1297年に彼が修道士として暮らす修道院から教会会議に書き送った謝罪状のみである³³⁾。後に触れるが、アタナシオスは1293年に総主教座を退去する直前、破門状を大教会内の柱

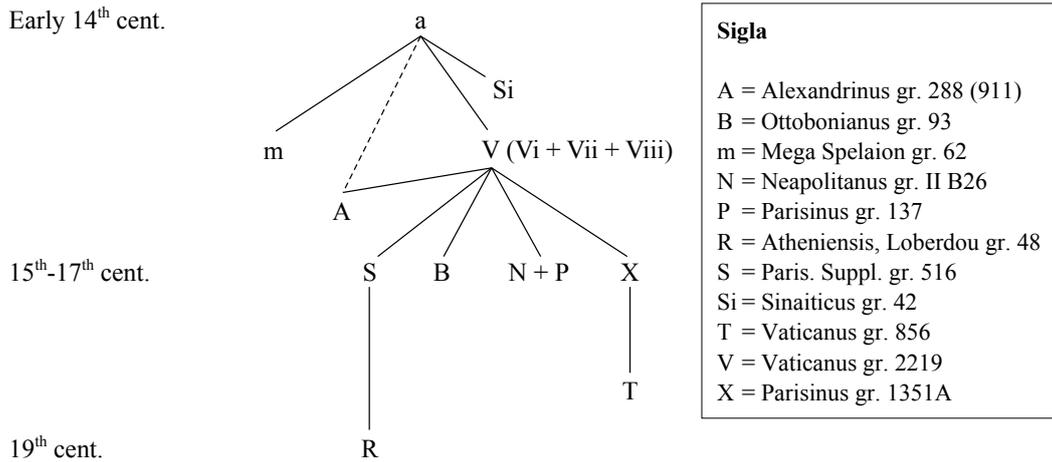


図2 パテダキスによるステマ (Patedakis, Athanasios, 154)

頭に隠し置いた。Si の書簡は、この破門状の発見後、教会会議からの問い合わせを受けて彼がしたためたものである。Si については、シェフチェンコが小論を著して、内容と成立年代を検討している³⁴⁾。写本そのものは、皇帝アンドロニコス2世パレオロゴス(1282-1328年)の治世前半に在位した3名の総主教(グリゴリオス2世、ヨアニス12世コスマス、アタナシオス)の辞任状ないし謝罪状を収録している。これらと同じ書簡は同時代の教会人ゲオルギオス・パヒメリスの史書にも収録されているが、パヒメリスの史書にある1293年のアタナシオスの辞任状がSiに含まれていないことから、シェフチェンコは、Siの写字生が転写のために参照したのは、パヒメリスの史書ではなく、パヒメリスが参照したのと同じオリジナルの書簡であると推測している。シェフチェンコは同論文において、パヒメリス研究者A・ファイエに自らの見解が文献学的に妥当であるか否か、私信を送って尋ねたことを明かしている。ファイエはSiとパヒメリスの史書の主要写本を比較した結果、Siは3写本の一つ、バルベリーニ・ギリシャ語写本204番(Vaticanus Barberini gr. 204 = C)と「非常に明確な関連があるように思われるが、つねにというわけではない」と、シェフチェンコの問いを部分的に肯定する内容の回答を寄せている³⁵⁾。Siの写本の制作年代は、写本の後半部分(f. 292r)にビザンティン暦6816年5月15日(西暦1308年5月15日)の日付の記載があること、そして、収録の順序がグリゴリオスの辞任状(1289年6月)、ヨアニスの辞任状(1302年7月)および謝罪状(1303年6月21日)、最後にアタナシオスの

謝罪状(1297年9月)となっていることから、ヨアニスが謝罪状を送った1302年6月21日から、写字生による記入がある1308年5月15日の間であろう³⁶⁾。重要な事実は、主要写本ではないとはいえ、Vよりも先にアタナシオスの書簡の転写された写本が存在することである。Siのアタナシオスの書簡がVに含まれない理由は、後に詳細に検討されるであろう。

パテダキスの博士論文の重要な学術的貢献の一つは、15世紀に由来する失われたmの書簡と同一のテキストを再発見したことである。パテダキスがアタナシオス書簡写本の広範な文献学調査に乗り出すまで、「Ἀθανασίου Κωνσταντινουπόλεως τοῦ Νέου ... ἐπιστολὴ πρὸς τὸν βασιλέα」を表題とし、「ἡμεῖς, ἅγιε βασιλεῦ, εἰ καὶ πάντων ἀνθρώπων ἐσμέν ἀνούστατοι καὶ ἁμαρτωλότεροι」を書き出しとするmの書簡は、Vにも確認されない、メガスピレオン修道院にしか伝来しないものと考えられてきた³⁷⁾。ところが、アレクサンドリアの総主教座図書館所蔵のAを綿密に調査したパテダキスは、同写本の中に、焼失したmのそれと同一と思しき書簡を発見したのである。問題のテキスト(ff. 228-231v)は、「Γράμμα πρὸς τὸν βασιλέα περὶ οὗ εἶπον οἱ σχισματικοὶ ὅτι ἐβλασφήμησεν εἰς Χριστὸν」と表題の表現こそ異なっているものの(アタナシオスから皇帝に送られた書簡を意味している点は共通)、書き出しの文章、「Ἡμεῖς, ἅγιε βασιλεῦ, εἰ καὶ πάντων ἀνθρώπων ἐσμέν ἀνούστατοι καὶ ἁμαρτωλότεροι καὶ ἀγαθοεργίας παντοίας ἀλλότριοι, ἀλλὰ ...」³⁸⁾がmのそれと正確

に符合するため、同一の書簡と判断されるわけである³⁹⁾。

mの書簡の再発見だけでなく、Aの全容を初めて正確に明らかにしたこともパテダキスの重要な貢献である。Aは全体で455のフォリオから構成される大部な写本であるのだが、1945年にモスホナスが刊行したアレクサンドリア総主教座文書館の写本カタログは、Aの内容に関しては正確さを著しく欠いていた⁴⁰⁾。そのため、Aを直接調査せず、モスホナスのカタログに依拠したタルボットは、Aには若干数のアタナシオス書簡しか収録されていないと判断したのである⁴¹⁾。しかし実際には、Aには35通を越える未刊行書簡が収録されており、より驚くべきことに、mの失われた書簡のほか、ストゥディオスのテオクティストスのアタナシオス伝の記述から存在自体は知られていながらも、いまだ現物が確認されていなかったアタナシオスの説教テキストもそこに含まれていた⁴²⁾。

Aの冒頭には書誌的情報を含むフォリオが付されており、その記述から、アレクサンドリア総主教ヨアキム（在位1486-1565年）が1526年2月20日に同写本を入手したことが確認できる⁴³⁾。アタナシオスの書簡が位置するフォリオ（ff. 145-231v）の前には、ニュッサのグレゴリオスのユダヤ人駁論を始め、サラセン人、アルメニア人、ラテン人、合同支持派の総主教ヨアニス・ベッコスらに対する匿名の駁論、ミハイル8世の後妃テオドラの信仰表明書、総主教キプロスのグリゴリオス執筆のベッコス駁論、そしてマヌイル1世コムニノスの時代に開催されたと思しきアルメニア人の宗教討論に関する一連の文書が配されている。アタナシオス書簡の後には、総主教フォティオスや皇帝ユスティニアヌスやバシリオス1世の著述など、主として教会の問題に関係する様々なテキストが収められている⁴⁴⁾。かりにアタナシオス書簡の部分を二部、それ以前を一部、以後を三部とすると、一部と二部の内容的連続性は注目し得る。ユダヤ人やアルメニア人、ラテン人やサラセン人を対象とする反駁書はビザンティン中期以降、宗教文学の一ジャンルとして確立するが⁴⁵⁾、このジャンルの著述から始まる集成の中に、13世紀後半のリヨン教会合同に直接関係するテキストが多く含まれているという事実は、少なくとも写本の一部と二部はリヨン教会合同の余韻が強く残っていた時代において、強硬な反教会合同派であ

ると同時にアタナシオスに好意的な人物によって作成された可能性を示唆する。また、パテダキスによれば、二部と三部の特定フォリオ（ff. 297-327）の写字生、および一部と上記30フォリオを除く三部の写字生は同一である可能性が高く、このことは、Aが異なる場所で異なる時期に作成された写本を集成したものではなく、特定の目的のために同一もしくは近接する時期と場所において作成された写本であることを示唆する。また、Aの内容は、その制作地が大量の宗教著述を所蔵する図書館のような場であったことを示唆する。というのも、書物の乏しい場で、これだけ種々の著述を収録する写本が作られたとはとても考えられないからである。Aの写字生はおそらく、彼ら独自の、あるいは彼らのパトロンプランに従いながら、図書館のような場で、必要な書物を書棚から取り出して作業机の上に広げ、黙々と転写を進めていった。

Aに転写されたアタナシオスの書簡はVのような書物的写本に含まれていたのか、それとも個々の紙片であったのか。これまで考えられていたよりもはるかに多くの書簡がそれに収録されているとなれば、アタナシオスの書簡写本のステマにおけるAの位置を正確に突き止める必要が生じる。パテダキスはAとViiiの間にある強い関連性に注目している。Aにあるおよそ35通の書簡（説教を含む）のうち、Viiiに含まれていないものはわずか3通のみである。その3通は収録の早い順に、修道士と修道女に対する指導書（ff. 212v-216: V, ff. 93-97）、それまで現存テキストが確認されていなかった説教（ff. 220v-228）、そして焼失したmの書簡と同じ皇帝宛ての書簡（ff. 228-231v）である。きわめて興味深いことに、AはViの書簡を1通も含まず、その一方、V全体やその他の主要写本には確認されない二つのテキスト（説教と書簡）を含んでいる⁴⁶⁾。

パテダキスはAの写字生がすでに仕上がっていたViiiを参照したと考えているが、これが現時点ではおそらくはもっとも妥当な見解であろう。証拠の一つは、Aの書簡の並びとViiiの書簡の並びが方向を同じくしていること、換言すれば、AとViiiの間で書簡の並びが逆転した箇所が一つもないことである。これは、Aの写字生が机上でViiiを参照し、収録書簡の取捨選択を行いながら転写を進めた想定するのがもっとも自然である。もう一つの証拠はAの中にある中断箇所である。Aの193フォリオ

から始まる、司祭の戦闘参加禁止や世俗官職の獲得禁止等を主題とする書簡は、同一フォリオ内で突如として転写が中断されている。なぜ写字生は中断したのか。パテダキスはAの193フォリオの数フォリオ前に転写された、実質的に内容を同じくする書簡(V, ff. 190-193v : A, ff. 190v-192v)の存在を理由に挙げている⁴⁷⁾。写字生はVの211フォリオから始まる書簡の転写を、Aの193フォリオにおいて開始してまもなく、両書簡の内容の類似に気づき、おそらく重複を避けると同時に、自らの労力と使用するフォリオを節約するため、一旦転写を中断した。そしてVのフォリオをめくり中断した書簡の末尾を確認したうえで、続く書簡(V, ff. 214v-215 : A, ff. 193-194)の転写を開始した。この解釈も推測の域を出るものではないが、並びの共通性と合わせて考えれば、ViiiからAへの転写が行われたことを示すきわめて有力な証拠といえるだろう⁴⁸⁾。

以上に加え、パテダキスはAとその他の写本の字句の異同にも注目している。彼によれば、AがVを含むその他の写本よりも適切な読みを与える事例(ῥητινήν A] ῥυτινήν V T X [E. 2.113], etc.)、AがVと共通の誤りを含む事例(ἀγγαρείαν] ἀγκαρείαν A V [E. 14.18], etc.)、AがVおよびVから転写されたその他の写本と共通の誤りを含む事例(ἐξήρψεν scripsi: ἐχειρψεν A V T X [E. 2.66]; τυχαίως corr.] τυχέως A V: ταχέως B N [E. 8.21], etc.)、そしてAに独自の誤りがある事例(ἐμπαθεῖς] ἐμπαθούς A [E. 2.57], etc.)の四つのパターンが確認されるとし、「以上の誤りの組み合わせはAがVから直接派生していることを我々に考慮させる」と述べている⁴⁹⁾。彼が想定するとおり、Aのアタナシオス書簡がVから転写されたものであるとすれば、Aの写字生は転写を進める過程で発見したVの中の綴りの誤りを訂正しえたり、それらを誤りと気づかずにそのまま転写しえたり、また、不注意により独自の誤りを犯しえたりであろう。AがV以外の、現存しないか未確認の写本にもとづいている場合は、AとVの相違はより目立つものとなるはずである。というのも、写本は一般に転写されるたびに、手作業に固有の新たな相違を生み出すからである。

さらにパテダキスはAの一書簡中の特定箇所にある空欄が、Viiiの当該箇所にもあることと、Aのアタナシオス書簡の開始フォリオ(145フォリオ)

に描かれた植物模様のヘッドピースがVの1フォリオのそれに酷似していることも指摘している⁵⁰⁾。

しかし、彼自身も認めているように、Aの成立に関するパテダキスの仮説に問題がないわけではない。一つの問題は、Vに未収録の二つのテキストに関係している。それらは、説教(ff. 220v-228)と書簡(ff. 228-231v)の順に、Viiiと重複する書簡が終わった箇所から書き出されている。これはViiiからAへの転写説を崩すものではないが、Aの写字生がV以外のアタナシオス史料へのアクセスを有していたことを示唆する⁵¹⁾。これに関連して興味深いのは、アタナシオスの伝記作者テオクティストスがAに収録されている説教と同じテキストの存在を知っていたことである。彼は伝記において、アタナシオスの二つの説教に言及し、それぞれの書き出しの部分を紹介している⁵²⁾。このうち、「Τὴν αἰχμαλωσίαν τοῦ γένους καὶ τὴν ἄλλην ὀργὴν τὴν διὰ τὰς ἀμαρτίας ἡμῶν ἀπολυθεῖσαν ἀπὸ θεοῦ」から始まる説教はタルボットによってViiiの一テキスト(ff. 188-190)と、さらに、パテダキスによってAの一テキスト(ff. 188v-190v)と同定されている⁵³⁾。もう一方の「Δεῖπνον ἐν τοῖς Εὐαγγελίοις λαμπρὸν ἀκούοντες καὶ πιστεύοντες ἐτοιμασθὲν τοῖς ὧδε βεβιωκόσιν ὀρθῶς」を書き出しとする説教が、パテダキスの研究によって、Aの中にその所在を突き止められたのである。

わずかに一写本でしか現存しないこの説教テキストをテオクティストスはいかに知りえたのだろうか。可能性はおそらく二つに限定されるだろう。一つは、テオクティストスがAを直接参照することができたケース、もう一つは、彼がA以外の現存しない別の写本、アタナシオスが典礼において朗読するために用いたオリジナル(現物)、もしくは写本ではないその写しのいずれかを参照することができたケースである。コンスタンティノーブルのストゥディオス修道院で長く暮らしたと推測される彼は、アタナシオス伝を執筆するに際して、貴重な歴史資料であるAをどこかで参照したのかもしれないし、タルボットが主張するとおり、テオクティストスが晩年のアタナシオスの弟子であり、アタナシオスのコンスタンティノーブルでの居住地、クシロフォス丘のメガス・ロガリアスティス修道院に一時期暮らしていたとすれば⁵⁴⁾、彼は同院に残されていたオリジナルを直接参照したのかもしれない(テオク

ティストスの参照した史料の問題は第2章でより詳しく論じる)。

もう一つの問題は、Aの中に、Viiに含まれる、修道士と修道女に対する指導書(A, ff. 212v-216: V, ff. 93-97)が混入していることである。これは理解しづらい問いを提起する。というのも、この書簡は、V未収録の2通のようにViiiと共通する書簡が終了した箇所ではなく、Viiiと重複するアトス山を宛先とする4通の書簡の間(A, ff. 209-220v)に配置されているからである。Aの写字生がViiiを机上に置いて作業していた場合、彼ないし彼女はなぜアトス山宛ての書簡を転写する作業を途中で中断し、修道士と修道女全般を対象とするViiの書簡を挟んだのか。彼はこのViiの書簡を転写した後は、Viiiのアトス宛ての3通の書簡(V, 255-261v)を省略し、アトス宛ての別の2通(V, ff. 268-269v)を加えている。そしてViii最後の2通(アトス宛て、皇帝アンドロニコスの誓約書)は写さず、上述のV未収録の説教テキストへと続けている。修道生活に関する指導という点では共通性があるものの、アトスとは無関係のViiの書簡が、Viiiのアトス宛ての書簡が連続する箇所に挿入されているのは不自然というほかない⁵⁵⁾。

しかし、この点をもってViiiからAへの転写が誤った仮説であり、AはVと同じくアーキタイプないしオリジナルをもとに作成されたと主張するならば、それも不自然ないし不合理な主張ということになるだろう。すでに触れたように、Aは書簡の取捨選択を行いつつも、全体にわたってViiiと同じ方向を保ち、後半部分にViiの書簡の唐突な挿入が生じて、それは乱れていないのである。パテダキスは想定していなくても、VとAが別の写字生らによって、送付された現物であれ、その写しであれ、個々の書面の束(バンドル)、それも何らかの方法で並びの固定された束から転写された可能性もある⁵⁶⁾。しかし、テキストが転写によってある程度固定される写本とは異なり、個別の書面に筆記されていたと思いき現物ないし写しが、図書室か写字室(スクリプトリウム)のような場所で順序を正確に保持しえたかどうかは定かではないし、未収録の2点を除き、AがVから派生したことの証拠が比較的豊富にあることは否めない。そのためAを文献学的に精査していない現状では、我々はパテダキスに従って、Aのアタナシオス書簡のほとんどはV

から転写されたと考えるべきであろう。

以上のように、新発見であるAやその他の写本を検討したパテダキスは、ネアラを除くアタナシオス書簡のステマを次のように再構成している(図2を参照)。まずは、現存しないアーキタイプ(=a)から、1308年5月までにSiが成立する。一方、同じくaからは1310年代ないし20年代に主要写本であるVが成立する。そしておそらくはVの成立から程なく、V収録の書簡と、V未収録でa(もしくは現存しない別写本)に由来するテキストを写したAが成立する。Aに含まれるV未収録の二つのテキストのうち、皇帝宛ての書簡はmの書簡でもあった。パテダキスは15世紀に制作されたmの書簡がaに直接由来すると考えているが、Aに由来している可能性も否定できない⁵⁷⁾。

15世紀になるとVから複数の写本が派生する。パテダキスは指摘していないが、これはビザンティン帝国の滅亡と関係している可能性が高い。帝国の滅亡前後、イタリアに亡命したビザンティン知識人が直接持ち出したり、ヨーロッパの収集家が購入したりして、ギリシャ語写本のヨーロッパへの大移動が生じた。実際、アレクサンドリア総主教座の財産となったAと19世紀に制作されたR(アテネ・ロベルドゥ・ギリシャ語写本48番)を除く、Vから派生した全写本がヨーロッパの図書館で保存されており、これはVの西方(イタリア)への移動が15世紀か16世紀に生じたことを端的に物語る⁵⁸⁾。15世紀にはVからXが成立し、XからTが成立した。16世紀にはVからS、N、Pが、17世紀には同じくVからBが制作された。Vから派生したこれらの写本は、いずれも皇帝宛ての書簡を中心に収録している。18世紀以降は活版印刷術の普及やその他の理由により、アテネ国立図書館にある19世紀由来のRを除いて、アタナシオス書簡の写本は制作されなかったようだ⁵⁹⁾。

パテダキスの提示するアタナシオス書簡のステマはタルボットのそれに比べ格段に詳細であり、Aの発見もあって学術的にもきわめて有意義なものであるが、解明すべき問題はまだまだ多く残されている。一つは、現存しないアーキタイプないしオリジナルの性質とそこに潜む差異である。書簡写本の起源を考察する場合、最初に写本にまとめられた複数の書簡が、空間を移動し、宛先に届けられたテキストなのか、それとも執筆者が手元に残した写しのテキスト

なのかを区別する必要が生じる。この点には、タルボットもパテダキスも十分な注意を払っていないように思われる。たとえば、タルボットは「おそらくオリジナルの書簡は束ねられていない紙面であった」と述べるのみで、オリジナルの差異には論及していない⁶⁰。パテダキスは後に触れるペレス・マルティンの学説を受け入れ、当初は総主教座内に保管されていただけのアタナシオスの個々の書簡の写しが、ある段階で写本に編纂されたと考えている。しかし、Aよりも先に制作されたVとVよりも先のSiの間に、さらにはVと、アタナシオスが1290年代に書いた書簡数通を収録するパヒメリスの史書の間に同一の書簡が確認されないという事実は、タルボットとパテダキスがVの直接の起源であると推測するオリジナルの書簡群が必ずしも単一的な性質のものではなかったことを強く示唆する。現実的に見れば、皇帝と皇族、大教会聖職者、全体ないし個々の府主教、アトス山全体や同地の特定の修道院や修道士、首都住民など、実に多様な宛先を有する彼の書簡が、写本を制作するために、送付された場所や人物から一様に回収された可能性はきわめて低く、パテダキスが推測するように、特定の場所に保管されていた写しの束をもとに写本が制作されたと考えほうが自然であろう。

しかし、現存しないオリジナルの書簡がすべて写しであったとは断言できない。なぜなら、個別の書簡が受け手から回収された証拠がないのと同様に、書簡写本が写しから制作されたことを明示する証拠も存在しないからである。もう一つの大きな問題は、アタナシオスの書簡写本の数が相対的に少ないことである。パテダキスが再構成したステマから一目瞭然であるが、写本の継起的発生を示す分枝は乏しい。つまり、SiやAやmのように、多くは一度発生しただけに留まり、派生写本を生み出していないのである。もちろん現在に至るまでの散逸の可能性も否定できないが、ビザンティン末期に由来する写本がヨーロッパや旧ビザンティン領内（たとえば、アトス山の諸修道院）に大量に残っていることを考慮に入れると、アタナシオスの書簡写本が最初に制作された14世紀以来、大量に制作されていた可能性はほとんどない。

これらはまさしくアタナシオス書簡集の起源に関する問題である。この起源に可能な限り接近する一つの手立てとして、次章では、主要写本であるV

の歴史的コンテクストの問題を考察してみたい。

第2章 書簡集のコンテクスト

アタナシオスの書簡集と我々が呼びうる写本群がなぜ現存するのかという問いに、ある人は文献学者の丹念な仕事を念頭に置きつつこう回答するかもしれない。おそらくはアタナシオス書簡の最初の本格的な集成であるVが成立し、それがいくつかの派生写本を生み出し、幸いにしてVを含むそれらの一部がある時点で散逸しにくい場に到達したからだ。しかしこの架空の回りくどい回答に対して、特定写本の複数の起源に関心を有する人は問いを投げ返すだろう。それではそのVはなぜ成立したのかと。いったい何が、いかなる歴史的条件がその成立を可能にしたのかと。

すでに触れたとおり、Vの制作状況についてのタルボットの答えは明快である。「Vがアタナシオスの死から程なく、その弟子の3人によって作成されたことは大いにありうる。おそらくこの写字生たちは、見出しうる総主教の書簡をすべて集め、歴史資料としてではなく、靈感を与える読書に用立てようと集成を物したのである」⁶¹。当時の史料中にVの制作に関する具体的な証言は存在しないため（たとえば、写本制作の有益な情報源となりうる奥付ないしコロフォンはVにはない）、タルボットの主張は究明不可能な問題に対する、有力な仮説であるかの印象を与えるが、我々はこれを可能性の低い仮説であると考えよう。

その主たる根拠はすぐ上で指摘した、現存する関係写本の少なさである。これはこれまでのアタナシオス研究ではまったく取り上げられていないが、考察に値する重要な問題である。というのは、その少なさ、アタナシオスの死後に編纂された聖人伝的テクストの相対的多さと好対照をなしているからである。総主教時代の彼は、パヒメリスら教養エリート的な教会人から過度に厳格な修道士として嫌悪されたが、一部修道士の間では、総主教就任以前からその教えを敬聴すべき高德な聖人的人物とみなされていた。アタナシオスの聖人としての評価はその死後、コンスタンティノープルやテッサロニキ、アトス山など、彼と縁が深かった場所で定着する。こうした流れの中、テオクティストスやヨシフ・カロトス、イグナティオスら、アタナシオスを彼らの時代の新たな聖人とみなし、その記憶を偲ぶ修道士た

ちによって伝記や奇跡報告集など多くの作品が執筆された⁶²⁾。

こうした記念的著述に関する文献学研究はいまだ十分には進展していないが、タルボットによれば、関係テキストの多くはアトス山（主としてイヴィロン修道院）と、コンスタンティノーブル総主教座に伝来している⁶³⁾。また14世紀半ばには、政府高官ニキフォロス・フムノスの修道女となった娘、イリニ＝エウロギアが、彼女の師父であった匿名の修道士に書簡を送り、彼が著したアタナシオスについての作品の貸与を求めたことが知られている⁶⁴⁾。つまり、以上の事実は、アタナシオスを聖人視する風潮が強まる中、彼の生涯や死後の奇跡を主題とした宗教的著述が一部修道士や修道女の間で、積極的に読書すべき、人気ある文献として広まっていたことを示唆する。現存する写本の相対的多さ、およびその地理的な分布がこの事実に起因していることは疑いないであろう⁶⁵⁾。

これに対して、アタナシオスの書簡写本は旧ビザンティン領では、アトス山にもハルキ島の修道院にも伝わっておらず、彼の絶筆と思しき皇帝宛ての1通が例外的にペロポネソス半島北部のメガスピレオン修道院の焼失した写本、mに含まれていただけである。アタナシオスの記憶を偲ぶ修道士たちが、「靈感を与える読書」のために書簡集を編纂したのだとすれば、書簡集の写本は聖人伝や奇跡報告集のようなテキストと同じ場所で保存されていてしかるべきである。しかし実際には、Vも、VIIIの書簡を多く含むAも、そうしたテキストとは完全に切り離された状態で、ビザンティン領から隔たったヴァティカンとアレクサンドリアにおいて保存されている。この問題がまずもって示唆するのは、タルボットの仮説が合理的ではないということである。タルボットの説を受け入れるなら、アタナシオスの修道院やアトスを中心にある程度流布したはずの書簡写本が、VやAなどの一部を除き、何らかの理由でそれらの場所から失われたと想定しなければならなくなる。一方、書簡集とその他のテキストの間には当初から関係がなかった、換言すれば、アタナシオスの書簡集は「靈感を与える読書」のために編纂されたわけではなかったと理解すれば、テキストの分布に相違が生じたとしても不思議ではない。

おそらく我々の見解を幾分補強するのは、アタナシオス伝の作者テオクティストスとヨシフ・カロテ

トスがアタナシオスの書簡をそれほど頻繁には引用していないという事実であろう。タルボットの見解が正しければ、その生涯の一時期、アタナシオスと同じメガス・ロガリアスティス修道院に暮らしたテオクティストスは、彼の伝記を執筆するに際して、一次史料である書簡集を自由に参照できたことになる。しかし彼は、書簡集が存在すること⁶⁶⁾、さらには特定の文章で始まる説教テキストが存在することを伝記本文で示唆しながらも、具体的に引用しているのはアタナシオスの1293年の辞任状のみである⁶⁷⁾。書簡集が身近にあったのであれば、彼はこの1通に留まらず、もっと多くの書簡から引用を行い、その記述に厚みを持たせることができたはずである⁶⁸⁾。一方、テオクティストスよりも後に、テオクティストスの伝記を参照しながら作業したと思われる第二の作者ヨシフ・カロテトスは、2通の書簡を引用している。1通は、テオクティストスが収録したのと同じ、1293年の辞任状であり、もう1通は、テオクティストスの伝記には含まれていない1309年の辞任状である⁶⁹⁾。

書簡集の起源に達しようとするほど、問題は錯綜していく。伝記の第一の作者テオクティストスは明らかに書簡集の存在を知りながら、なぜ1通の書簡しか引用していないのか。なぜ引用された書簡は1293年のアタナシオスの辞任状であって、それ以外のテキストではないのか。なぜ彼は特定の説教テキストの存在を知りながら、その書き出しを伝えるのみで、それ以上の引用を行っていないのか。一方、ヨシフ・カロテトスがテオクティストスの伝記には収録されていないアタナシオスの後の辞任状を収録しているのはなぜなのか。その情報源はVであるのか、それとも現存しない別の素材（写本、オリジナルの書簡、あるいはその写し）なのか。テオクティストスの場合は、アタナシオス書簡集へのアクセスが何らかの要因で制限されていたと考えることもできるし、もちろんたんなる偶然や、彼が意図的に書簡集を主要史料に用いなかったとみなすこともできる。しかし、現時点ではいずれが妥当であるかを判断することはできない。カロテトスの場合は、引用された2通の辞任状の出所を解明することが重要な問題となる。

アタナシオスの晩年の弟子であったと思われるテオクティストスと、総主教と直接の接点を持たなかったヨシフ・カロテトスが、実際にVやそれに

類する資料を参照したのか否かという問題に関しては、引用された書簡テキストを比較することで、暫定的な結論を導くことが可能である。

まずはテオクティストスとカロテトスがともに引用している 1293 年の辞任状テキストと、V にある同一のテキスト（タルボット版、111 番）とを、タルボットが作成している同書簡の批判アпаратゥスを参照しながら比較してみたい。タルボットのアпаратゥスでは、V およびそれから派生した S と N、アタナシオス・パントクラトリノスが 1940 年に刊行した、カロテトスのアタナシオス伝のパントクラトル写本（14 世紀中葉の cod. Pantokrator 251 ; = K）⁽⁷⁰⁾、そしてテオクティストスのアタナシオス伝のイヴィロン写本（14 世紀の cod. Iviron 50 ; = A'）とバルベリーニ写本（15 世紀の cod. Barberini gr. 583 [VI, 22] ; = B'）⁽⁷¹⁾、最後にパヒメリスの史書⁽⁷²⁾のテキストが比較されている⁽⁷³⁾。この書簡はパヒメリスの史書の中に重複箇所があることを理由に、タルボットはそれを比較対象の中に入れていないわけであるが、V と 2 篇の伝記の関係を解明することに重点を置くため、ここでは対象外とする。また、タルボットは、カロテトスのアタナシオス伝の 1940 年の校訂版を参照しているが、ここでは 1975 年に D・ツァミスによって刊行された同史料の新版⁽⁷⁴⁾を参照する。ツァミスの新版および A' の刊行テキストを独自に検討した結果、タルボット版の書簡 111 番のアпаратゥスは以下のように修正される（数字はタルボット版の行に対応：本文計 55 行）。

3 ἐξηραλισάμεθα A'B'K // τοῦ] τὸ K // 4 αὐτοῦ om.
K // 5 ἡγνοήκαμεν A' // 6-7 προαιρούμενοι om.
VSPA'B' // 7 ante καιροῦ add. καὶ K // 8 ἐν] ἐφ' A'K //
9 τῶν ἐνεργούντων K // ἐν om. A'B'K // 12 καὶ(3)
om. K // ταῦτ' K // 16 μόνον ταῦτα σφαλμάτων]
σφαλμάτων μόνον ταῦτα K // 19 δὲ om. K // 22
ἀσεμνότερα B'K ; σεμνότερα VSPA' // post ἔτρεψεν
add. αὐτούς K // post δὲ add. γε K // 26 πώποτε]
ποτε A'B'K // 32 καὶ] ἢ A' // 34 ἐξερευξάμενοι B' // 35
καὶ ἀλύτῳ] ἀλύτῳ δὲ A'B'K // 40 κατὰ τὸν εἰπόντα]
λέγοντες A'B'K // 41 ἀποτασσόμεθα A'B'K //
δεόμενοι A'B'K // ἡμῖν A'B'K ; ὑμῖν VSP // τε om. A'
B'K // 44 ἀπ' αἰῶνος A'B'K // ἡμῶν om. A'B'K // 45
εἶπον A'B'K // μου om. A'B'K // 47 παρασύρουσι A'B'K
// 48 εἶχε δὲ καὶ om. A'B'K // 49 ἰνδικτιῶνος ζ om. A'

B'K // μολιβδίνην SP // 50 εἶχε καὶ μολιβδίνην
βουλλαν πατριαρχικὴν καὶ κάτωθεν ταῦτα om. A'B'
K // 53 μὴ συνειδῶς] οὐ γὰρ σύνοιδα A'B'K // 54
ἰνδικτιῶνος ζης om. A'B'K

この修正アпаратゥスで言及されていない箇所は基本的にすべての写本で同一と考えてよいだろう。アпаратゥスは写本間にある差異のパターンを浮かび上がらせる。1293 年の辞任状テキストについてみれば、V との相違箇所の多くは A'、B'、K の 3 写本によって共有されており、写本が V、S、P からなるグループと A'、B'、K からなるグループに分かれているのは明らかである。このことが意味するのは、S と P が V から派生しているのと同じように、K および B' が A'、あるいは A' ときわめてよく似た写本 (= a' ; おそらくこれは、現存しないアーキタイプか現存するハルキ写本) から派生していることである。A' と B' の間の相違は数箇所しかないため、B' は A' から直接転写されたと推測することもできるが、B' が a' から転写された可能性も否定できない。したがって、B' と A' の正確な関係は、少なくとも、A' と同じ時期に制作されたと思われるハルキ写本を確認するまでは、明らかにならない。一方、K は A' および B' と共通する相違を持つが、K 独自の相違も多い。これは、K の写字生が A' ないし a' に依拠しつつも、転写の過程でテキストの一部に変更を加えたためと解釈することができる。K が A' ないし a' を介さずに、V かオリジナルの書簡から直接転写された想定する場合、K 独自の相違はそれによって説明されるかもしれないが、逆に K が A' (および B') と多くの相違を共有する理由は説明されない (V から転写された S と P に共通する相違を、なぜ K が共有していないのかを別の観点から説明する必要が生じる)。したがって我々は、カロテトスの引用テキストは、V にではなく、テオクティストス引用のテキスト、A' もしくは a' に依拠していると結論づけることができる。

それではテオクティストスの引用テキストの出所はどこか。それは 14 世紀前半に個々の書簡の束から制作されたと推測される V なのか、それとも V の写字生が参照したと推測されるオリジナルなのか⁽⁷⁵⁾。テキストが比較的短いことから決定的な結論を導くことはできないが、アпаратゥスにもとづいて有力な可能性を探ってみよう。アпаратゥスから

は、VとA'の相違の特徴の一つが、A'における省略にあることが確認できる。これはとくに後半部分に顕著であり、41行目の「τε」、44行目の「ἀπ' αἰῶνος... ἡμῶν」、45行目の「μου」、48行目の「εἶχε δὲ καὶ」、49行目の「ἰνδικτιῶνος ζ'」、50行目の「εἶχε καὶ μολυβδίνην βούλλαν πατριαρχικὴν καὶ κάτωθεν ταῦτα」、54行目の「ἰνδικτιῶνος ζ'ης」がそれにあたる。このうち、48行目の「εἶχε δὲ καὶ」と50行目の「εἶχε καὶ μολυβδίνην βούλλαν πατριαρχικὴν καὶ κάτωθεν ταῦτα」は、Vの写字生かその他の何者かが読み手の便宜を考えて付記したと思われる説明的文章であり、A'ないしa'がVから転写されたと想定する場合、その部分が省略されたとしても不思議ではない。この二箇所を差し引いてもいくつか省略箇所が残るわけであるが、これはA'ないしa'がVから転写されたことの間接的な証拠にはなりうる。というのも、一般に転写作業の途中でテキストに変化が生じる場合、付加よりも省略のほうが多かったと考えられるからである。これはとりわけ、大量のテキストが特定の写字生の手で延々と転写される場合などがそうである。付加を行うよりも省略を行うほうが写字生の労力を要しないし、疲れや不注意で単語を飛ばしたり行を飛ばしたりすることは中世においても起こりえたのである。これに対して、付加をする場合、慎重な写字生は文脈を考え、文意を損なわないように十分注意したであろうし、文脈を無視した場合も、いかなる語句を挿入するか若干は思考しなければならなかったであろう。実際、上に示したアパルトゥスからも、中世ビザンティンの写本制作において付加はそれほど頻繁には生じなかったことが推測できる⁷⁶⁾。

一方、A'ないしa'の引用がVではないテキスト、たとえば、オリジナルの書簡からなされている可能性はあるだろうか。話を簡単にするため対象をA'に限定し、A'の書簡テキストはオリジナルから転写されたと仮定する場合、A'とVの間に見られる相違に対しては、以下の二通りの説明を与えることができる。一つは、Vの写字生がほとんど省略を行わず、他方で、A'の写字生が多くの省略を行ったというもの。もう一つは、A'の写字生がオリジナルを忠実に転写する一方で、Vの写字生がテキストに多くの付加を加えたというものである。写本を転写する過程において、一般的には付加よりも省略が頻繁に発生したとすれば、Vがオリジナルから転写

されたときも、省略が相対的に多く生じたと考えるのが自然であろう。したがって、二つの説明のうち、後者は相対的に可能性が低く、前者のほうがより有力であると判断できる⁷⁷⁾。

しかし、ここで奇妙な問題が生じる。それはVの中に明らかな誤りが含まれている点である。これは写字生が文法的な誤りを犯しているということではなく、内容的にそぐわない単語を選択していることである。該当するのは22行目の「ἀσεμνότερα Β' Κ ; σεμνότερα VSPA'」と、41行目の「ἡμῖν Α'Β'Κ ; ὑμῖν VSP」である。22行目に関しては、V以下のテキストでは、総主教アタナシオスの指導を拒んだ人々が「より称讃されるべき」生活に回帰したという意味となり、B'とKでは「より不名誉な（称讃されざるべき）」生活に回帰したという意味になる。当然、文意を考えたときに適切であるのは後者、B'とKの読みである。一方、41行目については、V以下の読みでは、辞任する際にアタナシオスが、神が「あなた方」と彼らに慈悲深くあるように祈ったという意味になり、A'以下の読みでは、「我々」と彼らが対象として意味される。この箇所、あるいはこの辞任状全体において、実際にはアタナシオスを指す「我々」と彼への反対者である「彼ら」が対照的に言及されているため、A'以下の読みのほうが適切である。とすると、Vがなぜ一見して不適切な単語の一つならず二つも使用しているのかという疑問が生ずる。オリジナルの書簡に以上の単語が使用されていたとは考えにくいことから、Vの写字生が不注意に起因する単純な誤りを犯したか、彼がそれらの誤りを含む、オリジナルではない何らかのテキスト（たとえば、アタナシオスでない人物の手になる写し）を忠実に写したか、という二つの可能性が示唆される。

このV以下の写本における不自然な誤りの存在は、V、S、PのグループとA'、B'、Kグループの関係の問題について、さらなる示唆を与える。注目に値するのは、以上の二つの誤りに関して、A'、B'、Kのグループの中に相違が確認されることである。すなわち、B'とKは「より不名誉な」の適切な読みを採用しているけれども、A'はV以下のグループと同じ「より称讃されるべき」の不適切な読みを選んでいるのである。これが意味するのは、A'の写字生は転写をする際に、この語の不自然さに気がつかなかったということ、そして、A'の写字生が

書簡を引用すべく参照したテキストには、「より称賛されるべき」の語が含まれていたことである。依然としてテオクティストスのアタナシオス伝のステマを確定することはできないが、テオクティストスがある場所でVを直接参照し、おそらくは不注意により、アタナシオスの辞任状(111番)にある「より称賛されるべき」の語を自身の作品のアーキタイプに含ませた可能性は高い。この一部語句の相違の問題は次章で別の視点から考察される。

複数のテキストに引用がある、アタナシオスの1293年の辞任状に関する以上の考察からは、まず、カロテトスがテオクティストスのテキストを参照し、写本までは確定できないものの、それから引用していたことが判明した。また、テオクティストス引用のテキストとVの当該書簡(111番)との関係については、テオクティストスがVにアクセスし、それから自らの作品に引用した可能性がきわめて高いという結論が導かれた。この暫定的な結論は、テオクティストスのアタナシオス書簡集へのアクセスを示すその他の証拠もあわせて考慮される場合、彼がVから一書簡を転写した可能性をより強めるであろう⁷⁸⁾。

それではカロテトスが引用している1309年の辞任状についてはどうか。彼はVにある当該書簡(112番)から転写したのだろうか。タルボットのアプリトゥスは、ツァミスの新版の利用により以下のように修正される。なお煩雑さを避けるため、V、S、P間の相違およびKのテキストでは省略されている61行目以降の相違は省略した。(本文計74行)。

7 καὶ(3) om. K // 13 τὸν...πατέρα K // 13-14 τὸν μέγαν...ἰσαπόστολον K // 21 Θεῶ] αὐτῶ K // 23 πρὸς τὸ μέγα om. K // 25 καὶ(2) om. K // 26 ἁγίας καὶ om. K // 34 ante θεανδρικήs add. καὶ K // 41 ὑμῶν K : ἡμῶν VSP // 42 ἡμᾶς ἀπ' ἄρτι K // 52 ἀξιῶσοι K : ἀξιῶσει VSP // 54 ὁ om. K // 60 πᾶσι] καὶ πᾶσι Χριστιανοῖς ὀρθοδόξοις K // 61 post ἔλεος caetera om. K

率直に言えば、以上のアプリトゥスから確実な結論を導くことはできない。VとKの間にはいくつかの顕著な相違があるが、残念ながら省略、付加、訂正の規則性を判断するには不十分な量である。一

つの手がかりがあるとすれば、それはカロテトス自身がこれより先にテオクティストスのテキストから引用した、1289年の辞任状である。カロテトスは、辞任状テキストの後半部分ではA'(ないしa')のテキストをほぼ忠実になぞっているが、前半部分では細かな付加と省略を少なからず行っている。これが示唆するのは、彼が手元にあるテキストを厳密、正確に転写しようとする心があるタイプの写字生ではなかったことである。おそらく、将来そのアタナシオス伝を読書するであろう人々の存在を念頭に置きながら、カロテトスは彼自身の編集方針に従って作業を進めていたように思われる。もしこの想定が正しければ、いくつもの相違は、彼がVに依拠していた場合でも十分に発生しうる。多様な種類の相違があることは、必ずしも彼がVとは別の資料を参照していたことを意味しないのである。

これ以上考察を深められない以上、カロテトスがVにアクセスすることは物理的に可能であったか、と問いを変更してみよう。すぐ後に詳細に検討するが、Vは14世紀前半、コンスタンティノーブルにおいて制作され、その後も首都内の特定の場所で保管されていたと思われる。Vにアクセスしようと思えば、基本的にはコンスタンティノーブルに滞在する必要があったであろう。アタナシオスと直接の接触があり、首都の著名なストゥディオス修道院の修道士であったとも推測されるテオクティストスは、十分この条件を満たす⁷⁹⁾。一方のカロテトスは、出身地は知られていないものの、アトス山のエスフィグメヌ修道院、テッサロニキ、コンスタンティノーブルの各地に一定期間暮らしていたことが知られている⁸⁰⁾。アタナシオス伝を執筆した時期と場所は特定されていないが、彼はコンスタンティノーブルと接点を有しており、Vへのアクセスは彼が同地に滞在していたときに、物理的に可能であったと判断できる。

タルボットはアタナシオスの主要書簡集であるVが、その弟子の修道士らによって、彼らの生活のための宗教的著述として制作された可能性を示唆した。しかし、この主張にはいくつかの重大な問題点があることが確認された。確かに、アタナシオスの死後、彼の生と奇跡を主題とする一連の作品が彼を尊敬する修道士らによって作成されたこと、また、そうした作品に一部の修道士らが興味を持ち、入手した写本を彼らの修道院の蔵書としたことが、イ

ヴィロン修道院やコンスタンティノーブル総主教座に今日まで伝わる写本から読み取れるが、書簡集の写本には同様の歴史的性格を見出すことはできない。いずれも14世紀に成立したと考えられているVとA（アレクサンドリア写本）は、帝国の滅亡と前後して国外に流出した。すでに指摘したとおり、かりに、旧ビザンティン領において別の写本がVないしAから制作されていたならば、それらはアタナシオスの記念的著述とともに保存されていてしるべきである。やはり、VやAに類する写本が旧ビザンティン領に残っていないという事実は、VとAの制作の経緯や場所が、記念的著述のそれとは異なっていたことを示す。しかし、少なくともVはアタナシオスの記憶を偲ぶ修道士たちから完全に隔離されていたわけではなかった。テオクティストスはアタナシオスの書簡集なる書物を確かに知っていたし、その伝記にVの一書簡を転写、引用した可能性はきわめて高い。カロテトスも確実であるとはいえないが、1309年の辞任状をVから引用した可能性がある。

書簡集に関する、これらの一見矛盾する情報はいかに整合的に理解されうるか。タルボットの主張では、書簡集の写本がなぜビザンティンの諸修道院に残らなかったのかという問題をうまく解決することができない。手がかりとなるのは、やはり、VおよびAへのアクセスであろう。テオクティストスとカロテトスの引用テキストの考察からは、Vは参照可能な文献ではあったが、手元に置いて日々読書するタイプの文献ではなかったことが示された。こうした制限されたアクセスは、Vの保管場所がアタナシオスと縁のある場所ではなかったと考えるときにもっともうまく説明できる。アタナシオスと縁のある場所、たとえば、クシロフォス丘のメガス・ロガリアスティス修道院にVが保管されていたとすると、修道士たちは日常的にそれを読書したであろうし、修道院内外の彼への関心の高まりに応えるべく新たな写本を制作したり、転写のため外部に貸し出したりしたであろう⁸¹。しかし、それが特別の場所、稀少な書物や機密資料などを多く所蔵する公的文書館や、愛書家の私的図書室のような場で厳重に保管されていた場合、修道士たちの日常の読書に用立てるための写本が作成されなかったとしても不思議ではないし、アタナシオスの伝記を作成するという特定の目的を持つ修道士が、特別に閲覧を許可さ

れ、必要な箇所のみテキストに引用したということも十分ありうる。

以上、タルボットの仮説の問題点と、VおよびAへの制限されたアクセスを確認したところで、写本制作の問題を解決しうる新たな方向を探ってみよう。第二の仮説はアタナシオス研究とは異なる文脈で、スペインの文献学者ペレス・マルティンによってすでに提起されている。ペレス・マルティンがその緻密な研究によって示唆する仮説は、タルボットによって言及されながらも退けられた見解、つまり、アタナシオス書簡集が「歴史資料」として編纂されたとするものである。彼女はそれを総主教キプロスのグリゴリオスに関する文献学的研究⁸²において提示しているのであるが、その研究はいかなる点でアタナシオス書簡集の問題と交差するのであろうか。

彼女が目指すのは1310年代のコンスタンティノーブルにおける、ヨアニス・グリキスを中心とする知識人サークルの活動である。グリキスは1315年から19年まで、ニフォン（在位1310-14年）⁸³の後を継いで総主教を務めた人物であり、総主教就任以前の学者キプロスのグリゴリオス（当時の名はゲオルギオス）に師事していたことから窺えるように、当時の代表的知識人の1人であった。彼は総主教に任じられる以前は二つの高位世俗官職、エピ・トン・デイセオン（請願担当長官）とロゴテティス・トゥ・ドロム（駅逓長官）を歴任していた⁸⁴。14世紀中葉にかけて在野の学者として活躍したニキフォロス・グリゴラスが、1310年代前半、郷里のポントイラクリアからコンスタンティノーブルに転居した後、教えを受けるべく師事したのがこのグリキスである。グリゴラスはその後、コーラ修道院を生活の拠点として諸学問を修め、14世紀を代表する人文主義的知識人へと成長していく⁸⁵。

ペレス・マルティンはグリキスとグリゴラスの師弟関係を、キプロスのグリゴリオスの写本に見出している。彼女は、今日に伝わるグリゴリオスの著述の写本の多くにグリゴラスの筆跡を確認し、教師であったグリキスが弟子のグリゴラスに対して、自らの恩師グリゴリオスの著述の転写を指示したものと推測している⁸⁶。

写本を制作し、それによって過去の重要な著述を保存しようとするグリキスの文化的プロジェクトは、やがてはグリゴラス以外の人物をも巻き込んで

展開されるようになる。それを示す証拠としてペレス・マルティンが挙げるのは、グリゴリオスの自伝と200通を超える書簡を集成したモデナ・ギリシャ語写本82番である。かつてグリゴリオスの書簡写本を研究したラミアは、筆跡の相違から6人の人物が制作にかかわったと結論づけたが、彼女は9人の写字生の筆跡を認めている⁸⁷⁾。まず彼女は、S・クルシスによるギリクス研究⁸⁸⁾を参照したうえで、もっとも多くフォリオに転写した人物はギリクスその人であると主張する。次いで、193フォリオ裏から194フォリオの1.5フォリオに確認できる筆跡を、総主教座の聖職者ゲオルギオス・ガリシオーティスのものと特定する。これは彼女も認めているように、もともとはラミアが主張した学説である。

ラミアはグリゴリオスの三つの主要写本（モデナ写本、ヴァティカン・ギリシャ語写本1085番、ライデン・ギリシャ語写本49番）の関係を検討し、モデナ写本とヴァティカン写本が14世紀にアーキタイプから別々に制作されていること、そして同じく14世紀に由来するライデン写本がモデナ写本から派生していることを明らかにした。彼はヴァティカン写本の筆跡の持ち主を特定するには至らなかったが、ライデン写本については、欄外の書き込みから、14世紀前半に活動した大教会聖職者ゲオルギオス・ガリシオーティスとその写字生であることを発見し、さらにはこのガリシオーティスの筆跡がモデナ写本の一部、すなわち193フォリオ裏から194フォリオにも確認されると主張した⁸⁹⁾。

モデナ写本はガリシオーティスを含む複数の写字生によって制作されているが、ライデン写本はガリシオーティスが単独でモデナ写本から転写している。ラミアとペレス・マルティンの筆跡同定が正しいとすれば、モデナ写本とライデン写本の制作は似たような環境で実施されたことになる。モデナ写本の制作においては、直接転写したフォリオ数の多さが示唆するとおり、おそらくはギリクスが主導的な役割を果たした。ガリシオーティスはモデナ写本の制作においてはわずか1.5フォリオを転写したのみであったが、その後ある時期にモデナ写本を単独で転写し、ライデン写本を制作した。ガリシオーティスがギリクスを中心とする知識人サークルに属していたことは明白だろう。

ペレス・マルティンは筆跡の検討にもとづき、モデナ写本の制作にはガリシオーティスに加えて、グ

リゴラスも部分的に関与していたと主張している⁹⁰⁾。これは写本の制作年代を判断するうえで、重要な情報となる。というのも、グリゴラスの関与はモデナ写本の成立が、グリゴラスが首都に暮らし始めた1310年代前半より後であった可能性を示唆するからである。1315年の総主教就任の時点ですでに重い病を患っていたギリクスは、1319年の退位からまもなく死去したと考えられているため、写本が実際に制作されたのはおそらく1310年代後半である⁹¹⁾。

このようにペレス・マルティンはモデナ写本に現れる九つの筆跡のうち三つの持ち主を割り出したうえで、モデナ写本とVとの強い関係性に論及する。彼女によれば、モデナ写本の7フォリオから最後の195フォリオまでの間に、クアテルニウム（通常は8フォリオごとの束）の番号が計24箇所に入記されているという（8フォリオごとに、ギリシャ数字で35から58まで）⁹²⁾。グリゴリオスの自伝が配された1フォリオから6フォリオまでに番号は確認されず、このことはモデナ写本の書簡を収録したフォリオは当初は別のフォリオと連続していたことを示唆する。彼女の考えでは、モデナ写本の書簡セクションの前に位置することが想定されていたのは、Vである。一つの証拠は写本のサイズである。Vは縦23.8センチ、横15.5センチ、一方のモデナ写本は縦24センチ、横16センチ。つまり、両写本はほぼ同一のサイズということになる。二つ目の証拠は、Vのクアテルニウムの数である。彼女によれば、Vは計35のクアテルニウムから構成されている。これでは35のクアテルニウム番号から始まるモデナ写本と一つのズレが生じることになるが、ペレス・マルティンはVの第二部（Vii：第13クアテルニウム）が当初の予定に入っていなかったと考えることでズレを解消しようとする⁹³⁾。彼女は理由を明示してはいないのだが、Viiがわずか2通の書簡しか収録していないこと、しかもそのうち1通が、アタナシオスが死を意識しつつ記した遺言書⁹⁴⁾であることを考慮に入れると、それは決して不可能な想定ではない。注意すべきは、モデナ写本冒頭のグリゴリオスの自伝を別として、両写本とも比較的最近在位した総主教の書簡から構成されている点である。

両写本の連続を裏づけるのは以上の二つの証拠に留まらない。ペレス・マルティンは、1人の写字生

が双方の制作に関与していたことを示している。彼女はガリシオーティスの筆跡を検討した論文において、ガリシオーティスの筆跡の変遷 (evolució) 過程およびその特徴を明らかにしたうえで、Vの第一部 (Viii) の筆跡がガリシオーティスのものであると主張した⁹⁵⁾。パテダキスも独自の考察を行った結果、同じ結論に達しており、ガリシオーティスの両写本への写字生としての関与はほぼ確実であるといえよう⁹⁶⁾。

こうして、V、モデナ写本、ライデン写本の間にある強い関係性を確認した彼女は、それらの写本を「ギリキスの選出後、すなわち厳格なアタナシオスと腐敗したニフォンの文化的には不毛であった総主教時代の後、聖ソフィア〔総主教座〕が享受した文化的活動の反響」⁹⁷⁾とみなす。グリゴラスが首都に定着してギリキスの弟子になった年代にもよるが、それらの写本は、彼女のいう「文化的には不毛であった」時代、すなわち1310年代前半に制作された可能性も否定できない。しかし、彼女はさらなる証拠を挙げて、ギリキスの時代が総主教座の写本生産の画期であったことを説得的に示している。その証拠とは、総主教座の記録簿である。ギリキスの就任以前に総主教座から発行された文書は、断片的にしか伝わっていない。ところが、ギリキスの総主教時代から14世紀末頃に至るまで、相当数の総主教座文書(とりわけ常設教会会議の決議文書)が知られている。これは、ギリキスの時代からの関係文書を年代順に収録した写本(ウィーン・ギリシャ語写本47番、48番)が今日まで伝わっているためである⁹⁸⁾。この特殊な写本が制作されたのは、総主教に就任したギリキスが、総主教座から発行される文書の体系的保存を意図し、総主教座のアーカイブ機能を強化したからと考えるのがもっとも適当であろう⁹⁹⁾。そして、もし実際に、ギリキスが総主教座の記録簿的な資料を配下の役人に命じて作成させていたとすれば、彼はアーカイブの必要ないし意義を認める総主教として、多くの書簡を書いた前任の2人の総主教、グリゴリオスとアタナシオスの書簡集の制作および保存をも強く欲したであろう。総主教ギリキスのアーカイブ・プロジェクトなるものが実際にあったとすれば、それは、アタナシオスの書簡集が、タルボットの想定するような「靈感を与える読書」の材料としてではなく、総主教座の公的な「歴史資料」として制作された可能性を指し示すのであ

る。

ペレス・マルティンの以上の学説を受け入れるなら、Vの制作経緯は次のように再構成できるであろう。1315年に総主教に就任したギリキスは、総主教座が発行する文書のアーカイブの管理を実行するとともに、最近在位し、多くの書簡を書いた総主教の個々の書簡を可能な限り多く集め、それらを「歴史資料」として保存することを意図する。モデナ写本冒頭の自伝セクションにクアテルニウム番号が記入されていないことが示すように、おそらく、当初は2人の総主教の純然たる書簡集の制作が計画されていた。そして、グリゴリオスの書簡写本がギリキス自身を含む一団によって制作され、同時に、ガリシオーティスともう一人の写字生の手でViとViiiが用意された¹⁰⁰⁾。もしクアテルニウムの一つ分のズレがたんなる不注意によるものではなかったとすれば、この後、アタナシオスの書簡集のフォリオないしくアテルニウムの数を把握していた人物が、グリゴリオスの書簡集に先にクアテルニウム番号を記入した。ところが直後、アタナシオスの新たな書簡2通が作業場に届けられた。この2通を加えるとグリゴリオスの写本に記されたクアテルニウム番号との間にズレが生じてしまうため、2人の総主教の書簡を一冊の書物にまとめるという当初の計画は変更されることになった。グリゴリオスの写本には自伝のフォリオが冒頭に付加され、今日まで伝わるモデナ写本が成立した。時期は不明であるが、このモデナ写本の制作後、ゲオルギオス・ガリシオーティスは縦24.5センチ、横17センチと、モデナ写本より若干大きなサイズの紙を使用して、新たな写本を単独で作った(ライデン写本)。一方、アタナシオスの書簡集は、新たに届けられた2通が写本の間部分(Vii)に配置され、その後、何者かによって各書簡のタイトルが記入され、三部構成の写本(V)として完成した。

以上のように、Vが総主教ギリキスによる総主教座アーカイブの拡充というコンテキストにおいて成立したとすれば、その主な作業場は総主教座内の写字室であり、完成したVはモデナ写本とともに、総主教座の歴史を後世に伝える「歴史資料」として、総主教座のアーカイブないし図書室に保管されたことが推測できる。そうした特殊な場にある資料への外部からのアクセスはある程度制限されたはずであり、ペレス・マルティンの仮説は、アタナシオス書

簡集の14、5世紀に由来する二次写本が少ししか存在しないこと、そして、アタナシオス伝の2人の作者がそれから部分的な引用しか行っていないことを説明しうる。

しかし、彼女の仮説には一つの大きな問題点がある。それは、アタナシオスの当時の地位に関するものである。アタナシオスは1309年に、教会会議に辞任状を送って総主教座を去ったが、古代末期の教父ヨアネス・クリュソストモスのように、教会会議に参集した主教らにより解任された可能性がある。というのも、1309年からしばらく後に書かれた書簡（タルボット版、115番）の中で、彼は典礼を司ることも、周囲の修道士に説教を行うことも禁じられていると述べているからである。これは、司祭修道士であった彼が、その資格を停止ないしは剥奪されていたことを示唆する。アタナシオスは、パテダキスがAにおいて再発見した、その絶筆と思しき皇帝宛ての書簡においても、自らの名誉回復を強く求めており、この証言も、1309年以降、彼が不本意な境遇で暮らさざるをえなかったことを示唆する。おそらく彼は、正式な名誉回復がなされる14世紀後半まで、正教会の公的記念の対象からは除外されていた。以上のようなアタナシオスの境遇を考慮に入れて、ペレス・マルティンの仮説に従うと、総主教グリキスは、断罪された前任の総主教の書簡集をあえて制作したということになる。総主教座アーカイヴの拡充を第一の目的として彼がプロジェクトを指揮したのなら、彼がアタナシオスの地位などを無視したとも考えられるが、当時、アルセニオス派を中心とする、アタナシオスに敵対的な勢力が教会において一定の影響力を持っていたはずであり¹⁰⁰、グリキスのプロジェクトはそうした反アタナシオス勢力を刺激しないように進められたことが想像される。

この点については、Vの中に一つの興味深い証拠が存在する。それはVの最初のフォリオのヘッドピースの下に記入された、ViないしはV全体へのタイトルである。すでに引用されているが、重要であるので再び引用する。「我らが聖なる父コンスタンティノーブル総主教アタナシオスの、皇帝とその他の人々に宛てられた、その大いなる神的熱意を顯示する書簡」¹⁰¹。Vが制作されたと思われる1310年代後半時点で、アタナシオスの名誉回復がなされていないのは確実である。そうであるにもかかわらず、

この匿名のタイトル記入者は、「聖なる父」や「神的熱意」という語を用いることで、彼がアタナシオスの尊敬者であることを明示している。つまり、このタイトルは、Vがアタナシオスに好意的な環境において、彼に好意的な人々が進める私的なプロジェクトとして、制作されたことを示唆するのである。

Vが関係するのは、公的な事業か、それとも私的な事業か、公的なアーカイヴか、それとも私的な図書室かという難問にはここでは立ち入らない。我々はむしろ、タルボットの仮説が成立しがたいことを確認しえたことに満足すべきであろう。Vの冒頭のタイトルのみを見れば、Vがアタナシオス自身の修道院に由来していると考えられなくもないが、この可能性は、Vが総主教グリゴリオスの書簡集と明白な連続性を有するという事実によって排除される。なぜなら、アタナシオスの弟子の修道士らが、アタナシオスとは大きく異なるキャリアの持ち主であり、アタナシオス自身も高く評価した形跡のないグリゴリオスの書簡集を、有り難がったとはとても思われないからである¹⁰²。

第3章 書簡集の中の偽書

以上の考察からは、アタナシオスの書簡集Vの制作経緯がおもに二つの可能性に限定されることが示された。Vはおそらく、総主教グリキスの指揮する総主教座のアーカイヴ・プロジェクトの一環として制作され、総主教座のアーカイヴで保管されたか、グリキスやニキフォロス・グリゴラスもそこに含まれた教養人サークルにより、そこに属す何者かの私的図書室の蔵書となるべく制作された。いずれにせよ、Vの制作ないし成立はアタナシオス書簡集の起源の一つに過ぎない。写本が制作されるためには、アーキタイプないしオリジナルがすでに存在していなければならない。実際、アタナシオスの書簡は送られた現物にせよ控えにせよ、オリジナルと呼ばれうる書面が多数存在しており、Vの制作に関与した人々はその事実を知っていたのである。

アタナシオス書簡集の起源をめぐる考察は、Vの制作の問題を通り抜けた後は、Vの内的構造の問題に行き当たる。それはすなわち、Vとパヒメリスの不一致の問題である。なぜ、パヒメリスの史書よりも後に成立したと思しきVは、パヒメリスがその著作で引用している書簡を1通も収録していない

のか。なぜ、Vとパヒメリスの史書の間には、VとAの間にあるような、書簡の重複がまったく存在しないのか（文面の一部が重複する一例が後に詳しく検討される）。これはSiにも関係する問題である。すでに述べたとおり、Siには1297年にアタナシオスが教会会議へ宛てた書簡がキプロスのグリゴリオスとヨアニス・コスマスの辞任状等とともに収録されている。アタナシオスのこの書簡は、パヒメリスの史書には全文引用の形で収録されているが、Vには含まれていない。この不一致はなぜ生じているのか。この不一致の中にアタナシオス自身の痕跡を見出すことは可能であろうか。

収録書簡の不一致は一見したところでは、執筆の時期に起因しているように思われる。パヒメリスが引用しているアタナシオスの書簡はすべて、彼の最初の在位期に関連するものである。それらは、パヒメリスの引用する順に、1293年10月、アタナシオスが総主教座を去る前に聖ソフィア教会内に隠し置いた2通の破門状、同じく彼が総主教座を去る直前に皇帝に送った書簡、そして、総主教座を去った直後、コスミディオ修道院から皇帝に宛てた辞任状、最後は、Siにも収録されている、1297年の破門状の発見後に執筆された書簡である。一方、その大半の書簡がアタナシオスの二度目の在位期に由来するVには、パヒメリスの史書にある「アタナシオスが聖ソフィアに隠した書簡の中間部分と酷似する」¹⁰⁰、1293年の別の辞任状（タルボット版、111番）が含まれている。破門状が発見された1297年に関しては、パヒメリスとSiの書簡とは異なる、皇帝宛ての書簡（同版、2番）が収録されている¹⁰¹。

このことは収録書簡の不一致が執筆時期によっては明確に説明されないことを示す。かりにVの書簡がすべて二度目の在位期に由来していれば、写本の制作者らが何らかの意図をもって収録を二度目の在位期の書簡に限定し、それ以前の書簡を除外したということも考えられるし、写本の制作時に存命であり、何らかの方法で作業に関与していれば、アタナシオス自身がそうすることを望んだとも考えられる。しかし、Vには1293年の辞任から1303年の復位の間にかかれた書簡が含まれているため、それらは十分な説明とはならない。

問題は複雑な様相を呈する。ともに1293年と1297年に由来するアタナシオスの書簡を含むにもかかわらず、なぜ、Vとパヒメリスは同一の書簡を

含まないのか。パヒメリスはその著作に引用した書簡しか知らなかったのか、それとも、ほかの書簡の存在を知りつつ引用しなかっただけなのか。Vの制作者らは、アタナシオスの書簡の引用を含むパヒメリスの史書のことを知っていたのか、それとも、知らなかったのか。この問題については、ファイエが1293年の辞任に関連するアタナシオスの一連の書簡の真正性を検討することによって、一つの解決の方向性を示している¹⁰⁰。ファイエの主張はきわめて明快である。すなわち、Vにある1293年の辞任状（111番）は偽書である、というのがそれである。彼のこの主張は、収録書簡の不一致がオリジナルテキストの性質そのものにかかわる問題であることを強く示唆する。以下、彼がいかなる考察の道を通ってこの結論に到達したのか、その主張の是非および意義を判断するためにも、詳しく検討しておきたい。

ファイエがまず取り上げているのは、アタナシオスが総主教座を去る前に、聖ソフィア教会内に隠し置いた2通の破門状である。このテキストは1297年に発見されたものであるが、パヒメリスはアタナシオスが総主教座を去る直前にそれらを作成したと考え、1293年の彼の辞任をめぐる一連の記述の中で引用している。パヒメリスは、一つ目のテキスト（第一バージョン）を引用した後、「別のもの（"Ἔτερον）」と挿入句を置いて、二つ目のテキスト（第二バージョン）を続けている¹⁰⁰。この二つのテキストは内容のみならず、文章表現においても重複する箇所があるため、同一の書簡の別箇の部分である可能性は否定される。パヒメリスは付記的な記述を別にして、テキストの真正性を疑うことはしていない。

しかし、これ〔皇帝宛ての書簡〕には彼は慣習どおり署名していないが、先のもの〔破門状〕には彼自身の手で署名している。それにはこうある。「アタナシオス、神の慈悲によって、コンスタンティノーブル・新ローマの大主教にして世界総主教」。一方、隠されていた書簡には、さらに別の文言が記されている。後から彼の弟子たちによって付記されたのかはわからないが、それはこうである。「たとえば、私がそれら〔本文で述べられたこと〕に対して何かをなそうとも、私はそれを愛着なきもの、我々の本意

ならざるものとみなす。たとえ私の記すものが私の辞任にほかならないとしても」¹⁰⁸⁾。

以上のように、パヒメリスはアタナシオスの自署の存在をこれらのテキストの真正性を示す証拠とみなしている。ファイェは、パヒメリスが聖ソフィア教会から発見されたテキストの現物から直接引用したと推測し、実際に二つのテキストを並置し、異同の特徴を探っている。ファイェの指摘するところでは、両テキストの顕著な相違は語調と破門を宣告される対象にある¹⁰⁹⁾。第一バージョンにおいては、アタナシオスによって破門とアナテマの対象とされているのは「中傷者 (συκοφαντήραι)」であるが、第二バージョンにおいては、「中傷者」の語が一箇所「悪霊 (διαβολαίς)」¹¹⁰⁾に代えられているうえ、破門とアナテマの対象には「彼らの追隨者 (τὸν τοιούτοις παρασυρέντα)」が付加されている。まさに1297年の破門状発見時がそうであったように、アタナシオスの辞任の経緯を知る当時の読み手が「彼らの追隨者」を皇帝アンドロニコスその人と理解するのは明らかであった¹¹¹⁾。いずれのテキストも真正であるとすれば、文面の相違はアタナシオスが破門状を書き直したことを意味する。反対勢力の策謀によって孤立し、辞任を決意したアタナシオスは、中傷者全体に破門を宣告する内容の第一バージョンを作成する。しかし、これに満足しなかった彼は、皇帝に心理的動揺を与えることを明確に意図しつつ、破門対象に皇帝が含まれていると読むことが可能な第二バージョンを作成した。その結果、2通の破門状が聖ソフィア教会の柱頭に隠し置かれることになった。テキストが書き直されたのであれば、第二バージョンのみで事足りたのではないかという疑問も生じるが、ファイェの以上の説明は二つのテキストの存在および相違に関する、現状ではもっとも理に適った説明といえる。

パヒメリスの引用する破門状が重要であるのは、その文面の多くがVにある1293年の辞任状と重複しているからである。一例を示すと、111番「Τῆς Χριστοῦ ἐκκλησίας ὄς αὐτὸς οἶδε κρίμασι τὴν φροντίδα δεξάμενοι, οὐκ ἐξησφαλίσθημεν τοῦ μήτε τοὺς σχιζομένους τῆς ἐκκλησίας Χριστοῦ καὶ ὑβριστάς αὐτοῦ τιμωρεῖν, μήτε τοὺς ἀκαθαρταίς μοιχείαις τε καὶ πορνείαις ἐαλωκότας ἀναχαιτίζειν. (その方のみが理由を知る決定によりキリスト

の教会を引き受けたとき、我々は、キリストの教会から分離したり、彼を中傷したりする人々を確実に罰することも、姦通や売春といった不品行な行いに手を染める人々を抑えることも確実にはしなかった)」を書き出しとするが、これとほぼ同一の文章は破門状の第一バージョン前半部に確認できる(「Τῆς γὰρ Χριστοῦ ἐκκλησίας ὄς αὐτὸς οἶδε κρίμασι τὴν φροντίδα δεξάμενοι, οὐκ ἐξησφαλίσθημεν τοῦ μήτε τοὺς σχιζομένους τῆς ἐκκλησίας Χριστοῦ καὶ ὑβριστάς αὐτῆς τιμωρεῖν, μήτε τοὺς ἀκαθαρταίς μοιχείαις τε καὶ πορνείαις ἐαλωκότας ἀναχαιτίζειν.」)¹¹²⁾。両者の違いはわずかに二箇所、後者における「γὰρ」の付加と、「ὑβριστάς」の後の「αὐτοῦ / αὐτῆς」のみである。

細かな相違はあるものの、111番(タルボット版: 計55行)は冒頭から27行目までは破門状第一バージョンと重複し、28行目から36行目までは部分的に第二バージョンと重なる。111番と破門状との重複がまったく生じていないのは、37行目から47行目までのおよそ10行のみである。興味深いのは、111番のテキストにも破門状と同様、以下のような付記的な記述がある点である。

またそれ〔辞任状〕にはこうある。「アタナシオス、神の慈悲によって、コンスタンティノープル・新ローマの大主教にして世界総主教、第7インディクティオン」。これには総主教の銅の印璽が付属しており、その下にはこうある。「神と人々の前で私はこれら言葉によって歩む。そしてこれら言葉を守る。もし私がここで書かれたこととは異なる何かを語ったり行ったりすれば、私はそれを愛情なきもの、暴力的で非道な行為であるとみなす。私は退位の何らかの責任が私自身にあるとは思わない、キリストの恩寵によって。第7インディクティオン」¹¹³⁾。

ファイェがアタナシオスの第二の辞任状と呼ぶこのテキストに関しては、ローランもタルボットも真正性を疑問視していない¹¹⁴⁾。パヒメリスがたんに知らなかっただけで、実際はアタナシオスが、聖ソフィア教会内に隠し置いた2通の破門状のように、2通の辞任状を書いていた可能性は当然残る。アタナシオスが2通の辞任状を作成し、相対的に表現の穏やかな短文の辞任状を皇帝に送り、もう1通の、

破門状と内容の重複する、激烈な調子の辞任状のほうは発送せずに手元に残していたと考えることもできる。しかし、こう想定した場合、奇妙なのは2通の辞任状の宛先が異なっていることである。パヒメリスの引用する辞任状は皇帝に届けられ、総主教が皇帝に送る書簡においては署名を要しないという慣習どおり、アタナシオスの名は記入されていなかった。一方、第二の辞任状は宛先が明示されていない。宛先を示唆する二人称表現が一箇所しか使用されていない(41行目:二人称複数〔ὑμῖν〕)。しかも、その使用はすでに確認したとおり、文脈からは誤りと判断できるもので、テオクティストスとカロテスの伝記ではともに一人称複数(ἡμῖν)に変更されている。つまり、作者はもともと二人称の使用を意図していなかった可能性が高い。この想定が正しければ、二人称を使用せず、宛先を明示しない書簡の性格は、2通の破門状のそれと共通している。

以上の二人称代名詞の不自然な使用は我々独自の指摘であるが、ファイェは第二の辞任状と破門状を並べ、文章の重複箇所にある細かな相違の持つ意味を探っている。たとえば、辞任状の書き出しの一文にある代名詞「αὐτοῦ」は不自然な使用であると彼は主張する。破門状では、「αὐτῆς」が使用されており、これが文脈の中で意味するのは「教会の」(迫害者たち)である。これに対して、辞任状では「キリストの」(迫害者たち)が意味され、ニュアンスの相違が生じている。しかし、辞任状と破門状のいずれにも「教会が…迫害される(ἡ ἐκκλησία... ὑβρίσθη)」という表現があり、意味の一貫性を考えた場合、辞任状書き出しの代名詞は破門状におけると同じ、「αὐτῆς」であるべきと考えられる。また、23行目には、アタナシオスが中傷者の行為を指弾する文脈で、「κατὰ τῆς αὐτῶν ὑπολήψεως」なる表現が現れるが、これでは中傷者たちが「彼らの名声に対して」攻撃を加えるという意味となる。一方、破門状の対応する箇所には、「我々の名声に対して(κατὰ τῆς ἡμῶν ὑπολήψεως)」とあり、同じ文脈において意味が通るのはこの読みである。つまり、それぞれほぼ同一の文章を含むにもかかわらず、テキストの文面に一貫性が見られるのはパヒメリス引用の破門状の方であって、第二の辞任状には文脈と齟齬をきたしうる不自然な箇所が散見されるのである。後者にそうした複数の問題が確認できるとすれ

ば、それは、オリジナルが写本に転写される際に不注意の誤りが生じたからではなく、テキストそのものがアタナシオス以外の何者かによって作成された偽書であったからである。ファイェはそう結論づけている¹¹⁹。

ファイェは1297年の事件にも注目している。第二の辞任状の主な内容は、隠し置かれた破門状と同じく、アタナシオスに敵対した勢力に対する、破門とアナテマの宣告である。かりに、ローランが想定しているとおり、この書簡が当時すでに存在しており、他方で、パヒメリスがたんにそれを知らなかっただけとすれば、なぜ1297年の破門状発見が重大な事件となったのか。破門状の発見が皇帝や聖職者たちに衝撃を与えたのは、それまでアタナシオスが彼らに対して破門を宣告していた事実が一切知られていなかったからである。破門状の発見は、彼らにとって寝耳に水的な出来事として認識された。つまり、第二の辞任状は当時、公的な文書としては存在を知られていなかったし、おそらくは存在すらしていなかったのである¹²⁰。

ファイェは触れていないが、テキストの末尾の記述もそれが捏造された文書であることを強く示唆する。パヒメリスは読み手にテキストの文面と形態を正確に伝えるべく、末尾の部分を自身のコメントを添えて引用しているが、奇妙なことに、第二の辞任状においても、アタナシオス以外の何者かが解説的コメントを引用テキストに添えるという、パヒメリスと同様のことをしている。二つのテキストの末尾にはほかにも奇妙な対応関係がある。パヒメリスはアタナシオスの自署が確認されることから、本文そのものは真正と認め、末尾の付記的な記述については、彼の弟子が作成した可能性も否定できないと疑問を表している。一方、第二の辞任状においては、総主教が作成した正式の印璽書簡であることがコメントされ、それによってテキスト全体の真正性が明確に保証される形になっている。この点に、捏造したテキストの真正性を読み手に信じさせようとする作者の意図を認めることが可能かもしれない。

両テキストの対応は末尾の引用文にも及んでい。破門状においては、アタナシオス(もしくは彼の弟子)は非常にあいまいな表現を用いてではあるが、まもなく来る自らの辞任が本意なものであることを記している。他方、辞任状では、表現はより明確になっているが、実際に文章が意味するところ

は逆にあいまいになっている。アタナシオスが辞任状の内容に反することを「語ったり行ったり」することが「暴力的で非道な行為」とはどういうことか。考えられるのは、アタナシオスが辞任した後に、反対勢力に破門とアナテマを処した行為を釈明することである。これは実際の歴史において生じたことである。1297年、発見された破門状に関して、皇帝と教会会議から回答を求められたアタナシオスは、謝罪と釈明の書簡（パヒメリス引用および Si のテキスト）を送り、破門状の内容が無効であることを言明した。第二の辞任状の末部の一文は、あたかもアタナシオス自身が後に釈明することを予知していたかのように読むことができる。いつ発見されるともわからぬ破門状に対し、彼は釈明が必要となることを果たして予知していたのであろうか。

第二の辞任状の不自然な点は破門対象にも及んでいる。パヒメリス引用の破門状と重複する箇所においては、破門対象はアタナシオスの中傷者たちであるが、重複しない箇所においては、主教ら（οἱ ἀρχιερεῖς）がそれに含まれることが明示されている⁽¹¹⁷⁾。パヒメリス引用の破門状においては、破門対象は彼への中傷者全般および皇帝と思しき「彼らの追隨者」であり、主教は名指しされていない。辞任状のこの箇所と対応するように思われるのは、アタナシオスが1297年の破門状の発覚後、教会会議ではなく皇帝に宛てた書簡（2番）である。この書簡において、アタナシオスは自らの破門状の内容がいまだ有効であると主張し、破門対象が主教ら（「ここにいるすべての主教 τοὺς ὧδε πάντας ἀρχιερεῖς」）であったことを明かしている⁽¹¹⁸⁾。アタナシオスが破門状においては破門の対象をあえて不明確にする一方で、手元に残した辞任状では主教らが主な対象であることを明示していた可能性もないではないが、テキストのその他多くの問題点とあわせて考えると、テキストそのものが後代の偽書であったと理解するほうがより自然であろう。

第二の辞任状が偽書であるとすれば、いつ、いかにしてそれは捏造されたのか。ファイエは Vi の書簡の配列に注意を喚起する。タルボットが指摘しているように、Vi の書簡の配列は厳密ではないものの、おおむね作成された時代順となっている。にもかかわらず、第二の辞任状（111番）は Vi の末尾近く、1309年の辞任状（112番）の直前に配置されている。Vi の最後は、アタナシオスが1309年の

辞任のしばらく後に、二度の総主教位を振り返りながら書いた釈明的性格の強い書簡（115番）である。このことは、第二の辞任状がアタナシオスの二度目の辞任に関連する書簡にまとめられた可能性をも示唆するが、ファイエはそれぞれの書き出しに注目し、1309年の辞任状に合わせて、第二の辞任状が捏造されたと主張している⁽¹¹⁹⁾。3通の書簡の書き出しは以下のとおり。

- ・ 111番：「Τῆς Χριστοῦ ἐκκλησίας δις αὐτὸς οἶδε κρίμασι τὴν φροντίδα δεξάμενοι...（その方のみが理由を知る決定によりキリストの教会を引き受けたとき…）」
- ・ 112番：「Τῆς Χριστοῦ ἐκκλησίας δις αὐτὸς οἶδε κρίμασι καὶ δευτερόπρωτα τὴν φροντίδα διαδεξάμενοι...（その方のみが理由を知る決定により二度目にキリストの教会を引き受けたとき…）」
- ・ 115番：「Τῆς Χριστοῦ ἐκκλησίας τὸ πρῶτον ἐπὶ μόνῃ τετραετίᾳ γενόμενοι...（最初に4年間のみキリストの教会を引き受けたとき…）」

書き出しの明らかな共通性は、何者かがすでに存在する破門状を参照しつつ、112番および115番と書き出しを一致させる形で、第二の辞任状（111番）を作成した可能性を示唆する⁽¹²⁰⁾。「このことはおそらく、その著者自身〔アタナシオス〕によってというよりむしろ、師の著述をかき集めたその愛弟子によって実行されたのだ」⁽¹²¹⁾。以上のようにファイエは結論づけているものの、Vの制作および保管がアタナシオスの修道院ではなく、その他の公的ないし私的な場所に関係することを確認した我々は、タルボットの仮説に依拠するファイエの結論は不十分なものと指摘せざるをえない。

テキスト内部の矛盾、そしてテキスト外部の状況を考慮に入れた場合、第二の辞任状が偽書であることは明らかであろう。誰がそれを捏造したのかと問う前に、偽書を後世に伝えるという行為に関与した人物を確認しておこう。それは Vi の写字生、総主教座の聖職者ゲオルギオス・ガリシオーティスである。彼は総主教グリキスもしくは別の有力者が指揮したプロジェクトの中で、1通の偽書をアタナシオスの書簡集となるべき写本に転写し、その行為に

よって偽書の真正ならざる真正性を保証したことになる。果たして彼はそれを意図的に行ったのか、それとも彼は偶然行ったのか。彼自身が偽書を作成したのか、それとも彼は別の何者かが作成した偽書のオリジナルを転写しただけなのか。これは偽書と判断される第二の辞任状の成立にかかわる重要な問題である。

一つの手がかりは偽書の内的構造ないしその情報源である。第二の辞任状を作成した人物は比較的多くの資料にアクセスが可能であった。書面を作成するうえでの主要史料は聖ソフィア教会内に隠されていた2通の破門状である。作者はこの二つのテキストにある多くの文章を、ほとんど変更を加えることなく再利用している。一方、作者はアタナシオスが具体的には主教らに破門を下していたことを、おそらくViの2番を通じて知っていた。さらに作者は、同じくViの112番と115番を参照して、偽書の書き出しをそれらと一致させた。これらのことを実際に行える人物は限られてくる。それは、アタナシオスの周辺にいた弟子的人物か、Vの制作に関与した文人的人物のいずれかであろう。ちなみに、破門状のオリジナルを目にしたに相違ないパヒメリスは、1310年頃に亡くなったと考えられているため、彼が偽書の作者であった可能性はほぼ排除される。偽書の情報源に関して決定的な証拠となるのは、パヒメリスのテキストと第二の辞任状の間にある奇妙な一致である。もし後者の作者がアタナシオスの破門状をパヒメリスとは別のルートで、独自に入手していたとすれば、彼はあのような、引用文に自らの解説的コメントを添えた文章を作成しえたであろうか。すでに指摘したとおり、二つのテキストの間には、引用文の内容だけではなく、引用文にコメントを添えるという手法そのものにおいても強い共通性が確認されるのである。それを偶然と理解するのはきわめて困難である。一方、作者がパヒメリスの史書を参照しながら第二の辞任状を作成したと考えれば、彼が、パヒメリスのそれと同じような末尾の記述を作成し、パヒメリスの懐疑的コメントとは異なる積極的コメントを付すことで、偽書の真正性の保証を図ったとしても何ら不思議ではない。おそらく作者の手元には、パヒメリスの史書という、偽書を作成するのにうってつけの浩瀚な資料があったのである。

作者がパヒメリスの著作を参照していたとすれ

ば、作者であることが可能な人物は限られてくる。それがほぼ確実に排除するのは、その人がアタナシオスの弟子であった可能性である。パヒメリスは総主教座の高位聖職者であり、同時代屈指の教養人として数多の著述を残した¹²²。史書はその著述の一つである。ファイェの研究によれば、パヒメリスの史書の現存する写本、それもビザンティン期に由来する写本は比較的少なく、これは彼の史書がアタナシオスの書簡集と同様、当時、人気のある文献ではなかったことを物語る¹²³。その著作に価値を見出したのは、彼と関心を共有する、同時代の限られた教養人らであっただろう。したがって、Vを制作するときに、時期からして二次的な写本ではなく、パヒメリス直筆のアーキタイプであったと思しき文献を直接参照することができたのは、彼の周辺にいて、彼の仕事を高く評価する教養人らであったと考えられるのである。この点で、ガリシオーティスにはパヒメリスとの無視できないリンクがある。一つは、ガリシオーティスもパヒメリスと同じく、首都社会における教養エリートであったことである。彼は若き頃、総主教キプロスのグリゴリオスと総主教座の修辭学者マヌイル・オロボロスに師事したと伝えられている¹²⁴。もう一つは両者の職務である。ガリシオーティスは1303年頃、総主教座の助祭となり、1310年頃に総主教座聖職者法廷（エクディキオン）の長官（プロテクディコス）に就任したとされているが、彼の前任のプロテクディコスはパヒメリスであった¹²⁵。両者が実際にどのような間柄にあったのかは不明であるが、ガリシオーティスがパヒメリスの周辺にいる人物であったことは疑いない。したがって、ガリシオーティスがパヒメリスの著述にアクセスすることは、パヒメリスに嫌悪されていたアタナシオスの弟子たちがそうするよりも、はるかに容易であったと思われる。

以上のように見ると、第二の辞任状をアタナシオスに成り代わって作成したのは、ガリシオーティスと彼の周辺にいた人物のいずれかということになる。可能性をさらに限定する二つの目の手がかりは、偽書の下書きないしオリジナルの有無である。かりにパヒメリス引用の破門状とは異なる下書き、あるいはそれに相当する文書が存在していたとすれば、ガリシオーティス以外の人物が関与した可能性が浮上するが、そうした文書が存在しなかった場合、偽書の作者はガリシオーティスに限定される。

下書き的な史料が現存しているわけではないため、決定的な解答を導くことはできないが、現存するテキストの文面は、下書きがVの制作時点では存在していなかったことを示唆する。一つの判断材料は、第二の辞任状(111番)における不自然な誤りの多さである。下書きが存在していた場合、そのテキストは少なくとも二度、確認を受けたはずである。最初は、下書きそのものが作成されたとき、二度目は下書きからVの紙面へ転写されたときである。これが何を意味するかといえば、確認される回数が多いほどテキストの明らかな誤りが修正されやすいということである。たとえば、明らかな誤りとまではいえないが、文意に照らすと若干不自然さのある111番4行目の「αὐτοῦ」は、テオクティストスの引用(A'とB')ではそのまま残っているが、カロテトスの引用(K)では省略されている。また、22行目の「σεμνότερα」は、テオクティストスのバルベリーニ写本(B')とカロテトスにおいて、文脈的にはより適切な「ἀσεμνότερα」に修正されている。さらに41行目の二人称複数の代名詞「ὑμῖν」は、テオクティストスの二つの写本とカロテトスにおいて、より適切な一人称複数の代名詞「ἡμῖν」に修正されている。以上の例は、Vの111番にある誤りが、文意を適切に判断したであろうテオクティストスやカロテトスらによって修正された可能性を示す(伝記の作者とは別の写字生による修正の可能性もある)。これに関連して注目されるべきは、テオクティストスとカロテトスのテキストにおける修正の多くは、111番のテキストの、破門状との重複がない37行目以降に見られるという事実である。41行目の一人称単数の動詞「ἀποτασσόμεαι」は「ἀποτασσόμεθα」と一人称複数に変更されているし、この直後の一人称複数「δεόμενος」も「δεόμενοι」と同様に一人称複数に変更されている。さらに44行目と45行目にある人称代名詞「ἡμῶν」と「μου」はそれぞれ省略されている。

第二の辞任状に関して、カロテトスは明らかにテオクティストスの引用に依拠していることから、Vの111番のテキストを参照し、細かな修正を加えつつ、それを著作に引用したのはテオクティストスということになる。そのアタナシオス伝の写本に残る修正の痕跡は、引用者であるテオクティストスの困惑を物語るかのようである。彼はとりわけ37行目以降の文章における人称表現のばらつきに不自然さ

を感じ、統一させようと配慮している。それではなぜ、彼が逐一修正する必要があるほどに111番のテキストは不自然であったのか。もちろん、粗い下書きが何者かによって用意され、ガリシオーティスがそれを機械的に転写したというのも可能性の一つではある。しかし、下書きから転写する場合、テオクティストスのように文意を判断しながら、下書きにある誤りや不自然な箇所を訂正することも同時に可能であったはずである。逆に、下書きが存在しなかったとすればどうか。ガリシオーティスがパヒメリスの史書や手元に集められたアタナシオスの個別書簡を参照しながら、Vの紙面に架空の辞任状を書き込んでいった場合、アタナシオスの書簡とは異なる性格が単純な誤りや単語の不自然な使用とともに書面に滲むのは、ある意味当然の帰結であろう。これはとりわけ、彼が偽書の完成度よりも、個別書簡の束には含まれていなかった1293年の辞任状を創出し、Vの中に存在させることを重視して作業を進めていた場合に生じたであろう。ガリシオーティス以外の人物が下書きを作ったという想定も十分可能ではあるが、彼とパヒメリスの位置の近さを考慮すると、ガリシオーティスが偽書の作成に直接関与したとみなすほうが現状では妥当であろう。

おそらくガリシオーティスは、総主教座での上司に当たるパヒメリスと知的な交友を結んでいた。そして彼は、パヒメリスが同時代の出来事についての浩瀚な史書を執筆していることも知っていた。その後、パヒメリスの辞任ないし死を受けてプロテクディコスに就任した彼は、総主教グリキスもしくは別の人物からアタナシオスの書簡集の作成を命じられた。彼は、アタナシオスの暮らすクシロロフォスの修道院から書簡の控えの束を受け取り、わかる範囲でそれらを時代順に並べ替え、写本への転写を開始した。作業も終盤に差し掛かったとき、彼は控えの束の中にアタナシオスの最初の総主教位の辞任状が含まれていないことを発見した。彼は首都社会を揺るがした1297年の事件とパヒメリスの史書を通じて、アタナシオスの最初の辞任に関連する文書が複数存在することを知っていたため、書簡集の歴史資料として期待される完成度を考慮し、1309年の辞任状に似せた架空の辞任状を作成することを企図し、実行に移した。ガリシオーティスは自らがそうすることを深刻な問題とは認識していなかったと思われる。アタナシオスの書簡集は歴史資料の保存の

ために作成されるものであり、それが多くの人目に触れることを彼は想定していなかったであろう。実のところ、彼が捏造したテキストは無からの創出物ではなく、大部分は、パヒメリスの史書に引用された2通の破門状に依拠していた。おそらくこれが、テキストの内的完成度にガリシオーティスがさほど配慮しなかった理由であろう。彼は1293年の辞任状を創出した後、残る4通の書簡を転写して作業を終えた。

その後しばらくして、首都内の特定の場に保管されたアタナシオス書簡集に、ある明確な目的を持ってアクセスを試みる人物が現れた。1人はアタナシオスの晩年の弟子であり、その伝記の執筆を志したストゥディオスのテオクティストスである。彼はVを一通り閲覧した後、いかなる理由によってか、ガリシオーティスの偽書である辞任状をその著作に引用した。あえて理由を推測すれば、テキストの内容の激烈さが彼の関心を惹いたのである。主教団に宛てられた1309年の辞任状では全体を通して穏やかな調子が保たれているが、2通の破門状に依拠して作られた1293年の辞任状は、アタナシオスに敵対した「中傷者」勢力と主教団に対して破門とアナテマが宣告されるという、きわめて辛辣な内容となっている。アタナシオスが総主教として孤立した様と敵対勢力に対する彼の憤怒を鮮やかに伝える資料として、それが読み手に与えるであろう衝撃をテオクティストスは期待したに相違ない。テオクティストスから見て、テキストにはいくつもの不備があったが、彼はそれを捏造によるものとは思わなかったであろう。というのも、テキストに添えられた解説的コメントは、それがもともとは総主教の銅の印璽をともなった、公式かつ真正の文書であると控え目に、しかしもっともらしく主張していたからである。結果、テオクティストスは細かな修正を随所に施したうえで、解説的コメントを除くテキスト全文を引用したのである。

アタナシオス伝の第二の作者カロテトスも、アタナシオスの書簡集にアクセスを試みた人物である。すでに確認したとおり、彼はアタナシオスの1309年の辞任状(112番)をその伝記に引用している。彼がテオクティストスの伝記の存在を知っており、しかも、1293年の辞任状をVから直接にではなく、テオクティストスのテキストから引用したとなれば、彼がVと思しき資料にアクセスを試みた理由

は自ずと限られてくる。それはつまり、先行するアタナシオス伝の補完、ないし、自らが執筆するアタナシオス伝のオリジナリティの主張である。テオクティストスが最初の総主教位の辞任状しか収録していないことから、カロテトスはテオクティストスのそれを読んだ際に、記述のバランスの点から、1293年の辞任状だけでなく、1309年の辞任状をも引用するの必要を感じたのであろう。しかし、このカロテトスの目にもテオクティストスの場合と同様、偽書である1293年の辞任状は真正のテキストと映じたであろう。

こうして奇妙なことに、Vの制作時に聖職者ガリシオーティスと思しき人物によって捏造された1通の偽書が、二つのアタナシオス伝にも収録されることになった。アタナシオスが1293年の辞任直前に聖ソフィア教会に隠し置いた2通の破門状をもととするこの偽書は、成立するや否や、アタナシオスの声と生の息吹を伝える真正のテキストとしての歩みを開始し、その後、二人の修道士の手になる伝記に収録されることによってVの保管場所を越え、アタナシオスを慕う修道士たちの住む場所へ回帰したのである。

第4章 アタナシオスと書簡集の起源

それではVに1通の偽書が含まれているという事実は、Vとパヒメリスの史書における収録書簡の不一致の問題にどのような光を投じるのか。

明らかなのは、ガリシオーティスらがVを制作したときに、1293年に由来する辞任状なり破門状なりがオリジナルの書簡の束の中に含まれていなかったことである。パヒメリスの史書が偽書を作成するための素材として参照されたのはそのためである。この事実はアタナシオスのオリジナル書簡の性質に関する問題——宛先に届けられたテキストであるのか、それともアタナシオスの手元に控えとして残されたテキストであるのか——を考えるうえで一つの重要な手がかりとなる。

すでに示唆したとおり、Vに収録された書簡は実際に宛先に届けられたテキストではなく、控えのないしは下書き的なテキストであったと考えられる。一方、パヒメリスがその史書に収録したテキストは、控えではなく、実際に宛先に届けられた、もしくは書き手であるアタナシオスの手元を離れたテキストであった可能性が高い。パヒメリスは大教会の高位

聖職者の1人として、教会に関連する同時代の文書を容易に閲覧することができたであろう。けれども、両者は決して親密な関係になかったと思われることから、パヒメリスがアタナシオスの手元にある資料に直接アクセスすることは不可能に近かったであろう。

パヒメリスの史書をひも解くと、彼が総主教の任免に関する具体的なエピソードのみならず、関連する文書群にも多大な関心を寄せていたことがわかる。彼はアタナシオスの1293年の辞任に関連して五つのテキストを引用しているが、それ以外では、総主教グリゴリオスの辞任状と総主教ヨアニス・コスマスの辞任状および謝罪状を引用している⁽¹²⁸⁾。パヒメリスがそれぞれについて、写しのテキストを参照したとは考えにくく、同時代の歴史を詳細に書き記そうとした彼が、皇帝もしくは教会に届けられたテキストを直接参照し、自らのテキストに引用したと考えるべきであろう。

以上のことから、パヒメリスが参照したアタナシオスのテキストと、V収録のテキストはその性質を異にしていることが明らかとなる。Vのアーキタイプが控えの束ではなく、送付された書簡の束であった場合、パヒメリスの史書に収録された五つのテキストがVに見出せないのはなぜなのか。送付されたオリジナルの書簡は現存していたが、ガリシオーティスらが何らかの理由でそれを収録しなかっただけなのか。それとも、それらはVの制作時まで偶然ないしその他の理由で失われてしまったのか。いずれの可能性も皆無であるとはいいい切れませんが、考慮すべきはやはり、個別の書簡の散逸のしやすさであろう。たとえば、3名の総主教の辞任に関連する書簡を収録しているパヒメリスは、グリゴリオスより前に在位した総主教の辞任状は一切引用していない。これは、パヒメリスが、テキストが現存するにもかかわらず、あえてそれを収録しなかったというよりむしろ、テキストが現存していなかったために引用することができなかったと見るべきであろう⁽¹²⁹⁾。逆にいえば、たとえ総主教の辞任状という重要なテキストではあっても、個別の書簡の状態に留まる限りはつねに散逸の可能性にさらされたがために、パヒメリスはそれが現存しているうちに、引用という方法によって保存しようとした、と考えることもできる。パヒメリスが孤立した事例でないことは、収録内容は若干異なるものの、パヒメリスの

史書と同じ3名の総主教の書簡を収録するSiの存在が示している⁽¹²⁸⁾。

一方、オリジナルの性質に関して、パヒメリスが参照したテキストとVのテキストとの間に決定的相違があることを認めても、収録書簡の不一致の問題は残る。具体的には、パヒメリスが引用したテキストの控えの有無が問題となる。かりに控えがあったとすれば、それがVに収録されていないのはなぜか。また、控えがなかったとすれば、どうしてこれらのテキストにはそれがなかったのか。これと関連する無視できない問題は、Vの中に、アタナシオスの最初の在位期に由来する書簡が一つも確認されないことである。1293年に由来するとされてきた111番が偽書と判明したため、そうした書簡は文字通り皆無ということになる。アタナシオスが最初の在位期にどの程度の書簡を書いたかは直接的な証拠がないため不明であるが、パヒメリスの引用が示すとおり、少なくとも彼が総主教位を退く際に複数の書簡を書いたことは確実である。

このことが示唆するのは、アタナシオスがある時期から、認めた書簡の控えを手元に残し始め、その集成がVの原型になった可能性である。この想定が妥当であるならば、ある時期より前の書簡がVに含まれていない理由も容易に説明できる。もちろん、たんなる偶然としてそれを解釈することもできるため、この想定が妥当であるためには、よりポジティブな証拠が必要となるであろう。アタナシオスが意図して控えを残したことを直接伝える証拠は存在しないが、私見では、Vの起点的テキスト、すなわちVの中でもっとも早く書かれた書簡をめぐる状況が一つの有力な間接証拠になるように思われる。その起点的テキストは偽書であることが判明した1293年の辞任状(111番)ではなく、1297年、破門状発見後に彼が皇帝へ宛てた書簡(2番)である。

すでに触れたとおり、アタナシオスは1297年の事件に関連して、まったく異なる内容の2通の書簡を作成している。パヒメリスの史書およびSiに収録されているのは、皇帝と教会会議からの問い合わせへの応答として作成された、破門状の無効を宣言し、赦しを求める内容の書簡である。これに対し、2番は皇帝のみを宛先とし、主教団に対する破門の継続を激しい調子で主張する内容の書簡である。パヒメリスは後者を知っていた気配はなく、前者の全

文を引用し、若干のコメントを添えただけで次の話題へと移っている⁽¹²⁹⁾。しかし、アタナシオスは公的な返答を寄せた直後に、相反する内容の書簡を皇帝に宛てたのである。この2通の書簡からは、皇帝への影響力を回復させようとするアタナシオスの政治的戦略を読み取ることができる。

パヒメリスが伝えるところでは、隠し置かれた破門状は、少年たちが聖堂内で孵化した鳩の雛を捕まえようとしていたときに偶然発見された。この知らせは直ちに総主教と皇帝に伝えられた。アタナシオスの破門状は、おそらく彼が意図したとおり、彼の反対勢力と皇帝に対する破門の宣告として読まれ、皇帝らに大きな動揺を与えた。最大の問題として彼らから認識されたのは、アタナシオスが総主教在位中に破門を宣告しているため、彼が総主教座を退いて、一修道士として暮らしている状況では破門の解除が教会法の観点からは不可能なことであった。この問題をめぐっては高位聖職者による協議も行われたが最善の解決は示されなかったため、皇帝はアタナシオスの真意を確認するべく、皇帝と教会会議それぞれの代表として、政府高官ニキフォロス・フムノスと大教会ハルトフィラクスのニキタス・キプリアノスをクシロロフォスの修道院へ派遣した⁽¹³⁰⁾。これを受けて送付されたのが、パヒメリスの引用する書簡である。この書簡には皇帝と教会会議が期待したとおりの内容が記されていた。しかし、前後の経緯とアタナシオスの性格を考慮した場合、この書簡がアタナシオスの真意を伝えるものではないことは明らかである。おそらく彼は、一方で教会にさらなる混乱をもたらさないために、他方で皇帝個人にはさらなる心理的圧力を加えるために、内容の異なる2通の書簡を利用したのである。すなわち、彼は第一の書簡を送って皇帝や総主教らを安堵させた後、真意を綴った第二の書簡を皇帝に宛て、自らが受けた不当な仕打ちを訴え、皇帝の良心に働きかけようとしたのである。

興味深いのは、1297年に由来する書簡が2通ありながら、Vに収録されているのは、彼が1293年の2通の破門状と同じような調子で当時の真意を書き綴った第二の書簡のみという事実である。つまり、アタナシオスが自らの書簡の控えを残したという想定が正しければ、アタナシオスの意図した起点はこの第二の書簡になるのである。

アタナシオスの意図を示唆するのは第二の書簡そ

のものと当時の政治的コンテクストである。彼は文中で次のように述べている。

しかし私は陛下に驚いています。というのは、あれら書簡の一つが明るみに出たとき、もし神を敬う気持ちがあるなら彼ら〔アタナシオスの反対勢力〕が求めてしかるべき赦免を、あなたご自身が私にお求めになったからです。そして神をもっとも愛する皇帝よ、たとえ昏でそれが話されたとしても、改心せざる者に赦免が決して認められないことをあなたは十分ご存知です⁽¹³¹⁾。

この書簡においてアタナシオスは皇帝が破門対象であったと言明しているわけではないが、聖ソフィア教会に残した破門状において彼が皇帝をその対象に含めていたことは明らかである。以上の文面からは、比較的早くに発見された破門状が、おそらくはアタナシオスが予期したとおりの効果を発揮したことがわかる。彼のいう皇帝の赦免要求が皇帝と教会会議による正式の問い合わせを指しているのか否かはわからないが、皇帝は自らが破門対象として非難されていると認識し、アタナシオスにその解除と赦しを求めたのである。

アタナシオスは皇帝の敬虔さを称揚する一方で、4年前の自身の窮状を見て見ぬふりをしたとして皇帝を強く非難している⁽¹³²⁾。つまり、アタナシオスは皇帝が自らの孤立と辞任に対する責任を少なからず負っていると主張しているのである。彼が皇帝の敬虔さを称揚している理由は、皇帝が赦免を求めたという事実求められるであろう。というのも上の引用文が示唆するように、アタナシオスの認識では、赦免を求める行為は罪を犯した人々の後悔と改悛を前提とするからである。

これらのことが何を意味するかといえば、破門状が有した力、ひいてはテキストの力そのものをアタナシオスが認識したことである。1293年、アタナシオスは総主教座内で孤立し、不本意な辞任を余儀なくされた。辞任を覚悟した彼は皇帝に短文の書簡を送ったが、皇帝がそれを受けて事態の打開に向けて動いた気配はない。また、総主教座を退いて修道士の地位に戻った彼が、総主教ヨアニスの司る教会に影響を及ぼした痕跡もない。ところが、1297年の破門状の発見が状況を文字通り一変させることに

なった。破門状はアタナシオスが総主教として作成した真正のテキストとして直ちに認められ、破門が依然有効であり、しかも解除が現状では不可能であることも認められた。アタナシオスが書面作成時に皇帝を意図したであろう「追随者」の語は、総主教からも皇帝からも、皇帝その人を指す語として理解された。その結果、アタナシオスは撤回と謝罪という方法によって、皇帝らへの破門の無効性を唯一宣告できるキーパーソンとして現れたのである。

修道院に隠退した彼は、修道院を外出することなく自らの意思を表明し、皇帝や教会に影響力を行使する手段として、書簡を書き送ることを選んだ。これは、修道院に留まる以上は物理的にそうせざるを得なかったというよりむしろ、アタナシオスが声の限界および声を伝える書簡の有用性を改めて認識したためと考えるべきであろう。実際、1297年の第二の書簡の中には、アタナシオスが声や発話を重視しながらも、メディアとしての書簡ないしテキストにも同等の高い価値を認めていたことを示唆する記述がある。彼は自らが総主教として直面した困難を述べた後、次のように書いている。「そのため、私は私に向けられた不正を司祭の神に対して、書面によって、同時に書面によらずに宣告した」⁽¹³³⁾。破門状がすでに存在する以上、彼は書面によって苦難を表し破門を宣告したことを否定できないわけであるが、「書面によらず（アグラフィオス）」、つまり声を発することでそうしたとも主張している。声による破門宣告があったことを証すかのように、彼は少し後の箇所で、自らが「聖なる祭壇の前に立ち、わが目と手を救い主に向けて」語ったという一連の破門の言葉を挿入している⁽¹³⁴⁾。引用文に続けて彼は次のように記し、再度、自らの行いが二重の方法でなされたことを示している。「これらのことを、私は神の前で言葉と書面によって行った」⁽¹³⁵⁾。

アタナシオスが実際に聖ソフィア教会の祭壇の前で破門の言葉を発したかどうかは今となっては確認の仕様がなないが、少なくとも以上の記述からは、彼が二重の方法を強調することで、破門の真正さを読み手である皇帝に強く印象づけようとしていることがわかる。より重要であるのは、声の優越と限界というジレンマを彼が十分意識していることであろう。彼は自らが祭壇の前で語ったという言葉を用いているが、それはすでに書かれた言葉になっており、彼の口から発せられた声としての言葉ではな

い。かりに彼が祭壇の前で語ったのが事実であったとすると、おそらくは無人の聖堂の中で、彼が発した言葉は誰の耳にも届くことなく虚空に消えたはずである。したがって必然的に、彼は自らが発した、あるいは発することを望んだ声を書面に書き留めなければならなかったのである。

しかし推測を重ねるならば、破門状を隠し置いた時点では、それが有する効果についてアタナシオスは半信半疑であったに違いない。なぜなら、総主教座を去った以上は、破門状が彼の期待するタイミングで発見されるとは限らなかったからであるし、それと知られることなく処分されたり、散逸したりする可能性すらあったからである。破門状は、それが発見され、総主教と皇帝によって内容を確認されて初めて、政治的な意味を持ったのである。このとき、当事者であるアタナシオスが自らの声を伝える書簡の力、あるいは書かれた声の力を自覚したのは間違いないであろう。破門状発見後にアタナシオスが二通りの書簡を用意し、皇帝に心理的圧力をかけていることは、その自覚の最たる証拠といえるであろう。

それではこの2通が別々の場所で現存していることは何を意味するのか。おそらくそれは、アタナシオス自身による偽りと真理の区別、そして真正なる声の保存への配慮である。真正なる声は真正なるテキストで運ばなければならない、真正なる声はそれを一語一句正確に伝えるテキストで残されなければならない。もしアタナシオスがこのように考えたとすれば、彼が皇帝と教会会議の問い合わせに対して送った返答は、本意に反することを書き綴った偽りの書簡ということになり、彼自身は保存の必要を感じなかったであろう。これに対して、皇帝に宛てた第二の書簡は、隠し置いた破門状と同様、アタナシオスの偽らざる気持ちを伝える、いわば真理の書簡である。破門状は幸運にも散逸することなく発見されたが、たとえそれが伝えるのが真理の声であろうと、書簡は発送された瞬間に、他者の手と偶然に委ねられる。作者はそれを送った瞬間に、その現存に対する権利を失う。したがって、真理の声を確実に残すためには、自らの意志でテキストの控えを作成することが不可欠となる。

アタナシオスの書簡集の一つの起源は、その成立と現存を可能ならしめた一つの決定的要因は、1297年9月、破門状発見後の彼の決意であろう。

後記

2008年12月18日夜に逝去された宇都紀子さんに本稿を捧げる。その日まで、我々は早稲田大学高等研究所において彼女とともに生き、ともに働いた。このような形で後に残されることを我々の誰が予期しえたであろうか。彼女の思い出の永遠ならんことを切に願う。

(2009年1月18日 筆者)

(1) 本文で触れなかった書簡の定義について、マイケル・トラップは近年編集した書物の序文で次のように記している。「書簡はある人（あるいは人々）から別の人への書かれたメッセージであり、それ自体送り手から受け手へ運搬されるべき、具体的なメディアに固定される必要のあるものである。正式には、それは、交流する双方の身元を明らかにする、慣例的かつ限定的な挨拶文（あるいはそれに類する語句）の中からあるものを文頭および文末に配する方法により、受け手から送り手へ公然たる表明のなされる書き物である」。M. Trapp (ed.), *Greek and Latin Letters: An anthology, with translation* (Cambridge, 2003), 1. Cf. R. Morello and A.D. Morrison (eds.), *Ancient Letters: Classical and late Antique epistolography* (Oxford, 2007).

なお本稿は、拙論『コンスタンティノーブル総主教アタナシオスと末期ビザンツ帝国の危機』（課程博士論文、京都大学、2006年度提出・受理）の同タイトルの補論2を修正したものである。

- (2) トラップは、6世紀のソロン、タレス、ファラリス、アナカルシス、ヘラクレイトス、ピタゴラス派、5世紀のテミストクレス、アルタクセルクセス、ヒッポクラテス、エウリピデス、ソクラテスとソクラテス派、クセノフォン、ディオゲネス、クラテス、アイスキネス、キオン、ディオオンに帰されている書簡はすべて偽書とみなし、プラトンとデモステネスの書簡については、「激しく議論されているが、それらは同じカテゴリーに属するかもしれない」と述べ、懐疑的な立場に立っている。M. Trapp, *op.cit.*, 12. デモステネスはプラトンおよびイソクラテスよりも数世代若いアテナイの政治家。イソクラテスについては、廣川洋一『イソクラテスの修辞学校——西欧的教養の源泉』（岩波書店、1984年；講談社学術文庫、2005年）を参照。
- (3) ソクラテスが書かなかったことの哲学史的意義については、J. Derrida, *De la grammatologie* (Paris, 1967)（足立和浩訳『根源の彼方に——グラマトロジーについて』現代思潮社、1972年）を参照。
- (4) Demetrius, *On Style*, tr. W. Rhys Roberts (London: The Loeb Classical Library, vol. 199), 223 (p. 438). Cf. H. Hunger, *Die hochsprachliche profane Literatur des Byzantiner*, 2 vols. (Munich, 1978), 199. アルテモンについては、J.M. Rist, 'Demetrius the stylist and Artemon the compiler', *Phoenix* 18-1 (1964), 2-8 およびそれへの反論である G.M.A. Grube, 'The date of Demetrius *On Style*', *Phoenix* 18-4, 294-302 を参照。
- (5) Demetrius, *On Style*, 228 (pp. 440-2).
- (6) トラップによれば、古代ギリシャで最初に言及される歴史的な書簡は、530-525年に由来するアマシスとポリュ

クラテスのそれであり、また、当初、紙の代わりに用いられていた薄い銅版が最初に確認されるのは500年前後であるという。書簡作成の一般化について、彼は以下のように述べている。「その他の証拠は、書字一般の習慣も、コミュニケーションの一形態としての書簡作成の具体的慣行も、5世紀終わりの数十年まで限定的に留まっており、4世紀半ばまでにはるかに広く流布し、普通の経験の一部になったことを示唆する」。M. Trapp, *op.cit.*, 6.

- (7) 山本光雄編『プラトン全集8』（角川書店、1974年）、332-3頁。
- (8) M. Trapp, *op.cit.*, 13-4.
- (9) 1500通以上が現存する、4世紀アンティオキアの教師リバニオスの書簡についても、一部（約600通）はリバニオス自身がその教育の宣伝のために刊行したと考えられている。M. Trapp, *op.cit.*, 16-7.
- (10) ゲルト・タイセンいわく、「最初にあったのは口頭でのコミュニケーションによる交わり」（強調はタイセン）であり、「原始キリスト教の第一世代が生み出した文学であるパウロの書簡もQ資料も、口頭でのコミュニケーションによる交わりに根差している」。ゲルト・タイセン（大貫隆訳）『新約聖書——歴史・文学・宗教』（教文館、2003年）、253頁。ヨハネを除く福音書記者が参照したと推測される、いわゆるQ資料について、タイセンは、初期教会の非主流派で、遍歴によってイエスの教えを広めようとした集団にその起源を求めている。同書、51-62頁を参照。
- (11) 同書、87頁。
- (12) パウロの書簡執筆に関する詳細は、D. Trobisch, *Paul's Letter Collection: Tracing the origins* (Bolivar, 2001); E. Randolph Richards, *Paul and First-Century Letter Writing: Secretaries, composition and collection* (Downers Grove, 2004) を参照。
- (13) A.P. Kazhan et als. (eds.), *The Oxford Dictionary of Byzantium* (Oxford, 1991)（以下、*ODB* と略）、s.v. 'Epistolography' (E.M. Jeffreys and A.P. Kazhan), 719.
- (14) *ODB*, 718.
- (15) Gregorios II of Cyprus, *Autobiography*, in: W. Lameere, *La tradition manuscrite de la correspondance de Grégoire de Chypre, patriarche de Constantinople* (Bruxelles, 1937), p. 187, ll. 11-4: 'Εἰ μὲν οὖν καὶ ζῆλου τι ταῖς ἀληθείαις ἀξιου καὶ λόγου περὶ τοὺς λόγους ἐξεγένετο κατορθῶσαι τῷ συγγραφῆι, ἦδε που παραστήσει τοῖς ἐξετάζειν βουλομένοις ἢ συγγραφῆ· καλῶ γὰρ οὕτω νῦν τὴν ἀνά χειρὸς πικτίδα.'
- (16) W. Lameere, *op.cit.*, 169. グリゴリオスの現存する演説テキストについては、S. Kotzabassi, *Die handschriftliche Überlieferung der rhetorischen und hagiographischen Werke des Gregor von Zypern* (Wiesbaden, 1998) を参照。
- (17) グリゴリオスが退位から少し後に亡くなったと伝えるのは、同時代の歴史家ゲオルギオス・パヒメリスである。その記事の位置から判断すれば、グリゴリオスは1290年末までに亡くなっていた。Georgios Pachymeres, *Relations historiques*, ed. and tr. A. Failler (Paris, 1999), VIII, 17 (vol. 3, p. 169, ll. 25-32).
- (18) W. Lameere, *op.cit.*, p. 189, ll. 14-5: 'καὶ ἄκων τοῦ συντάττειν ἐπαύσατο.'
- (19) ビザンティン帝国における修辞学の伝統については、

G.L. Kustas, *Studies in Byzantine Rhetoric* (Thessaloniki, 1973); E. Jeffreys (ed.), *Rhetoric in Byzantium* (Aldershot, 2003) を参照。コンスタンティニディスいわく、「修辞学はビザンティンの教育システムの枠組みの中で、もっとも重要であり、おそらくはもっとも時間を要する科目であった。ある時期のごくわずかな知識人によって書かれまた理解される言語で書けるようになるまで、学生らは長期の学習と困難な訓練を行う必要があった。そうした困難な学習は帝国の部局における公的職務、あるいは教会における高位のポストを獲得することにつながった。したがって、この教育は国家によってほとんど後援され、教会にも是認され、おもに首都やある時期は帝国の他の大都市に暮らす一部の学生しか受けることができなかった」。C.N. Constantinides, 'Teachers and students of rhetoric in the late Byzantine period', in: E. Jeffreys (ed.), *op.cit.*, 39-53, at 39.

20) Demetrius, *On Style*, 224 (p. 438): 「対話は話すことを表現するが、書簡は書かれ、ある方法で贈り物として送られる (ὁ μὲν γὰρ μιμῆται αὐτοσχεδιάζοντα, ἡ δὲ γράφεται καὶ δῶρον πέμπεται τρόπον τινα) 』。

21) A.-M.M. Talbot, *The Correspondence of Athanasius I Patriarch of Constantinople: Letters to the emperor Andronicus II, members of the imperial family, and officials* (Washington, D.C., 1975) (以下、Talbot, *The Correspondence* と略), no. 1 (p. 2): 「Τοῦ ὀσίου πατρὸς ἡμῶν Ἀθανασίου πατριάρχου Κωνσταντινουπόλεως ἐπιστολαὶ πρὸς τε τὸν αὐτοκράτορα καὶ πρὸς ἕτερουσ, πολὺν τὸν θεῖον ζῆλον ἐμφαίνουσαι。」

22) H. Hunger, *op.cit.*, 203-7.

23) *Ibid.*, 203.

24) *Ibid.*, 203.

25) マノリス (英語名エマニュエル)・パテダキスによる校訂テキストは、E. Patedakis, *Athanasios I Patriarch of Constantinople (1289-1293, 1303-1309): A critical edition with introduction and commentary of selected unpublished works* (D.Phil.Thesis, The University of Oxford, 2004) (以下、Patedakis, *Athanasios* と略) ; idem, 'Η διαμάχη του πατριάρχη Αθανασίου Α' με τον κλήρο της Αγίας Σοφίας (1289-1293, 1303-1309) μέσα από ένδεκα ανέκδοτες επιστολές (1306-1307)', *Ελληνικά* 56 (2006), 279-319.

26) Talbot, *The Correspondence*, xxxiii-xl.

27) Talbot, *The Correspondence*, xxxvi. V については、拙稿「コンスタンティノーブルを遠く離れて——総主教アタナシオスの初期の書簡写本と近年の研究を概観する」『地中海研究所紀要』第6号(2008年)、109-23頁中の113-8頁も参照。

28) Talbot, *The Correspondence*, xxxvi-xl.

29) Patedakis, *Athanasios*, 130-3.

30) X, ff. 296-337; T, ff. 234-250; B, ff. 189v-192v.

31) Patedakis, *Athanasios*, 130-2.

32) Patedakis, *Athanasios*, 132. シナイ山聖カテリナ修道院所蔵のギリシャ語写本には以下のカタログがある。V.N. Benešević, *Catalogus Codicum manuscriptorum graecorum qui in monasterio Sanctae Catharinae in Monte Sina asservantur*, vol. 1 (St. Petersburg, 1911).

33) Si, ff. 31v-32v.

34) I. Ševčenko, 'A new manuscript of Nicephorus Blemmydes' "Imperial Statue," and of some Patriarchal letters',

Byzantine Studies/ Etudes Byzantines 5 (1978), 223-32. 拙稿「コンスタンティノーブルを遠く離れて」、121-3頁も参照。

35) I. Ševčenko, *op.cit.*, p. 229. なぜファイエの回答がシェフチェンコの推測を部分的に支持するかといえば、写本テキストに見られる相違は、Si から C、あるいは C から Si への転写が行われた際に、写字生が故意ないし偶然にテキストに変更を加えた可能性とともに、Si が C とは別個に作成された可能性をも示唆するからである。ちなみに、パヒメリスの史書の C 以外の主要写本は、ミュンヘン・ギリシャ語写本 442 番 (Mutinensis gr. 442) とバルベリーニ・ギリシャ語写本 199 番 (Vaticanus Barberini gr. 199)。ファイエは、C がもっとも早くに成立し (14 世紀後半)、テキストにおいても現存しないアーキタイプにもっとも近い写本であると推測している。Pachymeres, vol. 1, xxiii-xxxiii; vol. 3, xiv-xx. パヒメリスの史書の写本伝来に関するより詳細な議論については、ファイエによる以下の 2 論文を参照。A. Failler, 'La tradition manuscrite de l'Histoire de Georges Pachymère (Livres I-VI)', *REB* 37 (1979), 123-220; idem, 'La tradition manuscrite de l'Histoire de Georges Pachymères (Livres VII-XIII)', *REB* 47 (1989), 91-181.

36) シェフチェンコは、総主教ヨアニスの 2 通目のテキストを 1302 年の暮れに書かれた書簡としているが、これは誤りである。したがって、彼が Si に想定する、1302 年暮れからアタナシオスが復位する 1303 年 6 月 23 日の間という制作年代はほとんど根拠を失う。I. Ševčenko, *op.cit.*, 230 および拙稿「コンスタンティノーブルを遠く離れて」、121-2 頁、とくに註 52 を参照。

37) Talbot, *The Correspondence*, xli.

38) Patedakis, *Athanasios*, no. 17, ll. 3-4.

39) Patedakis, *Athanasios*, 133.

40) Th.D. Moschonas, *Πατριαρχεῖον Ἀλεξανδρείας. Κατάλογοι τῆς πατριαρχικῆς βιβλιοθήκης*, vol. 1: *Χειρόγραφα* (Alexandria, 1945), 182-7. モスホナスは収録されたアタナシオス書簡の 1 通目の表題しかカタログに記載していない: *Ibid.*, 185: 「(ff. 145r-231v) Τοῦ ἐν ἀγίοις πατρὸς ἡμῶν ἀθανασίου π(ατ)ριάρχου κωνσταντινουπόλεως γράμμα πρὸς τὴν ἐξαρχίαν καὶ πάντας πιστοὺς· ἐκ τε τῶν θείων κανόνων καὶ ἐτέρων ἀγίων π(ατέ)ρων· ἐν ὑστέρω δέ, ἐκ τοῦ πρὸς ἐφεσίους ἠθικοῦ ἐνδεκάτου τοῦ χρυσοστόμου πατρὸς, μεθ' ἃ καὶ ὡς δέον τοὺς ἱερεῖς ἐκδιδάσκειν καὶ ἀναστρέφειν。」

41) Talbot, *The Correspondence*, xli.

42) Patedakis, *Athanasios*, 149.

43) Moschonas, *op.cit.*, 187: 「ἡ πάρχει το βηβλήω ἐτούτω. τοῦ κύρ σωφρονίου τὸ κατακόστω, γιαλέτζα. καὶ ἐχάρισέ μετο ἐμένα τοῦ ἐλαχίστου τῶν ἀρχιερέων ἰωκεῖμ ἀλεξανδρείας ἵνα συγχωρῶν τῶν πατέραν του, π(α)π(ά) κύρ θεόδωρον γαλέτζα, ὦν ὁ θ(ε)ς τάξην τὴν ψυχὴν αὐτῶν μετὰ τῶν δικέων ὁμῶς καὶ τῆς μητρόστου. καὶ τῆς μάρμστου ἀγγελίνας. καὶ καλῆς καὶ γεωργίου ὦν ἀναβλήζωνται. μετὰ αὐραάμ. καὶ ἰσαάκ. καὶ ἰακῶβ· καὶ ἀκοήσουν τὸ δεῦτε ἡ εὐλογιμένοι καὶ τὰ ἐξῆς καὶ ἴτης τὸ κλέψη ἀπέ τὸ π(ατ)ριαρχίω τῆς ἀλεξανδρείας νὰ ἔχει τὰς ἀράς τῶν ἀγίων π(ατέ)ρων· καὶ ἐμοῦ τοῦ ἀμαρτωλοῦ. ἔδωσέμετο. ἐν μηνὶ φευρουαρίω κ' ἐν ἰν(δικτιῶ)νος ἰδ' ἡμέρα τρίτη τῆς δευτέρας εὐδομάδος τῆς ἀγίας

τεσσαρακοστής. † Ἰωακείμ Ἀλεξανδρείας†.

以上の書誌的記述からは、アレクサンドリア総主教ヨアキムがソフロニオス・ガレザス（もしくはヤレザス）という名の人物から写本を入手したことがわかる。パテダキスも指摘しているように、以上の引用文には口語ギリシャ語に起因するスペルミスが多く見られる。Patedakis, *Athanasios*, 144, n. 76

- (44) Patedakis, *Athanasios*, 144-50. なお三部に収録されているのは、順に、フォティオスの書簡、14世紀の著述家ニキフォロス・カリストス・クサントプロスの著述、総主教シニオスの報告書、助祭アガピトスの皇帝ユスティニアヌス宛ての書簡、皇帝バシリオス1世のレオン6世宛ての書簡、教父の異端論駁、フォティオス、13世紀のオフリド府主教ディミトリオス・ホマティノス、大教会ハルトフィラクスのペトロス、ハルトフィラクスのニキタス、セレ主教の著述、フォティオスの書簡、アンティオキア総主教バルサモンの著述、教父・総主教の諸著述、主の兄弟ヤコブの典礼、主教の移転についての著述、アルメニア人論駁。
- (45) こうした宗教文献のうち、ローマ教会およびラテン人の信仰と慣習を攻撃の対象としたテキストについては、T.M. Kolbaba, *The Byzantine Lists: Errors of the Latins* (Urbana, 2000)の研究が重要。
- (46) Patedakis, *Athanasios*, 149.
- (47) Patedakis, *Athanasios*, 144 and 152.
- (48) 転写の中断箇所が存在がきわめて重要であるのは、それによって、AからVIIIへの転写の可能性が完全に排除されるからである。
- (49) Patedakis, *Athanasios*, 152.
- (50) Patedakis, *Athanasios*, 152.
- (51) このほか、当初、Vの最後にこの二つのテキストが位置し、その後何らかの理由で失われた可能性もある。Patedakis, *Athanasios*, 152. しかし、後に詳しく見るように、Vと強い連続性を有する写本が存在することと、V未収録の皇帝宛ての書簡の少し前に書かれた、アタナシオスの遺言書がVIIIではなく、VIIに含まれていることから、二つのテキストがVに含まれていた可能性はきわめて低いと判断される。
- (52) Theoktistos the Stoudite, *Vita Athanasii*, ed. A. Papadopoulos-Kerameus, in: *Zapiski-istorikofilologicheskago fakul'teta Imperatorskago S.-Peterburgskago Universiteta* 76 (1905), 1-51 (以下、*Vita Athanasii*, Iと略), at 25-6.
- (53) Talbot, *The Correspondence*, xli; Patedakis, *Athanasios*, 149.
- (54) A.-M. Talbot, *Faith Healing in Late Byzantium: The posthumous miracles of the Patriarch Athanasios I of Constantinople by Theoktistos the Stoudite* (Brookline, Mass., 1983), 32-3.
- (55) 以下に示すのは、AのVからの派生を認めたいえでの、挿入経緯についての我々の仮説である。Aの写字生はVIIIからの選択的転写を行う傍ら、VIIIに何らかの理由で未収録であった二つのテキストの現物ないし写しを、作業の場を用意する。写字生はAのアタナシオス・セクションの最後に、この二つのテキストを配置する予定であった。また、写字生はVIIの2通のうち、修道士と修道女を宛先とする長文の書簡を、AのVIIIの書簡セクションの後に

転写する予定であった。VIIIの転写の終盤に差し掛かったとき、写字生はAに転写する書簡を選別するため、あるいは休憩か睡眠のため、アトス宛ての2通を転写した後、作業を一時中断した。作業を再開した写字生は、VIIIからの転写を終えたと勘違いし、VIIの書簡を転写してしまう。やがて自らの不注意に気づいた写字生は、やむなくVIIの書簡の後にアトス宛ての2通の書簡を続け、最後は予定通り、VIII未収録のテキストをAに写した。

- (56) パテダキスが想定するのは、AがVとは別の「写本」から転写された可能性である。Patedakis, *Athanasios*, 152.
- (57) mは焼失したため、ステマの中に正しく位置づけることはもはや不可能である。
- (58) Vはヴァチカン文書館で保管される以前に、枢機卿ジョヴァンニ・サルヴィアティ (1490-1553年)の所有物であったことが知られている。Talbot, *The Correspondence*, xxxiii. サルヴィアティの蔵書については、A. Cataldi Palau, 'La biblioteca del Cardinale Giovanni Salviati: Alcuni nuovi manoscritti greci in biblioteche diverse della Vaticana', *Scriptorium* 49 (1995), 60-95を参照。
- (59) アタナシオスの書簡が初めて印刷されたのは16世紀半ばである。スペイン出身のイエズス会士フランシスコ・トーレス (1509頃-84年)は1551年にフィレンツェで刊行した書物に、ラテン語訳した8通のアタナシオス書簡を附録として含めた。ミーニュの著名なギリシャ教父集成に収録されているアタナシオスの書簡は、このトーレスのラテン語版である。Talbot, *The Correspondence*, xlii-xliv.
- (60) Talbot, *The Correspondence*, xxxvi.
- (61) Talbot, *The Correspondence*, xxxvi. タルボットがこの引用で「[アタナシオスの]弟子の3人」と述べているのは、Vには三つの異なる筆跡が確認されるためである。
- (62) A.-M. Talbot, *Faith Healing in Late Byzantium*, 16-30; 拙稿「コンスタンティノーブルの奇跡——総主教アタナシオスに注目して」『アジア遊学』115号 (2008年)、66-75頁を参照。
- (63) A.-M. Talbot, *Faith Healing in Late Byzantium*, 1-30. 今日、コンスタンティノーブル総主教座の図書室にある、アタナシオス関係のテキストを多く含む写本 (cod. Const. Chalc. mon. 64)は、かつてはハルキ島の聖三位一体修道院の蔵書であった。タルボットは、この写本はもともとアタナシオスの修道院 (メガス・ロガリアスティス)に属していたと推測している。この写本を入手して、聖三位一体修道院の図書室に移したのは16世紀の教会人ミトロファニスである。Ibid., 38-9.
- (64) A.C. Hero, *A Woman's Quest for Spiritual Guidance* (Brookline, Mass., 1988), no. 1 and commentary (pp. 104-5). この修道士は、アタナシオスについての著作はテッサロニキにあると彼女宛ての書簡で回答している。
- (65) たとえば、タルボットによれば、テオクティストスのアタナシオス伝は、以下の5冊の写本に含まれている: Iviron 50 (14世紀)、Barberini 583 (15世紀)、Const. Chalc. mon. 64 (14世紀)、Iviron 369 (17世紀)、Dionysiou 3685 (17世紀)。興味深いのは、バルベリーニ写本を除く4冊が旧ビザンティン領に伝来していることである。
- (66) *Vita Athanasii*, I, 24, 31 and 32; Patedakis, *Athanasios*, 134, esp. notes 33 and 35.
- (67) *Vita Athanasii*, I, 28-30. Cf. Patedakis, *Athanasios*, p. 134,

- n. 35.
- (68) テオクティストスのアタナシオス伝は、全般に、彼独自の情報源によりながら記述されており、彼が執筆に際して、アタナシオスの書簡集を丹念に読み込んだ証拠は乏しい。たとえば、書簡のほとんどはアタナシオスの二度目の在位期に由来しているにもかかわらず、テオクティストスによるその在位期の記述は比較的簡略である。書簡集からは、アタナシオスが同名のアレクサンドリア総主教を含む一部の主教と、また、シスマ勢力であるアルセニオス派と激しく対立していたことが確認できるが、テオクティストスは教会内のこの政治対立にはほとんど言及していない。この問題については、A.-M. Talbot, 'Fact and Fiction in the *Vita* of the Patriarch Athanasios I by Theoktistos the Stoudite', in: *Les vies des saints à Byzance: Genre littéraire ou biographie historique?* (Paris, 2004), 87-101, esp. 93-4 を参照。
- (69) Joseph Kalothetos, *Vita Athanasii*, in: D.G. Tsamis (ed.), *Ἰωσήφ Καλοθέτου Συγγράματα* (Thessaloniki, 1988), 453-502 (以下、*Vita Athanasii*, II と略), at 491-2 and 499-500.
- (70) Joseph Kalothetos, *Vita Athanasii*, ed. Athanasios Pantokratorinos, in: *Θρακικά* 13 (1940), 56-107.
- (71) A・パドプロス・ケラメウスがテオクティストスのアタナシオス伝を校訂するのに参照したのがこの2写本である。テオクティストスのアタナシオス伝の正確なステマを作成するためには、14世紀のハルキ写本 (Const. Chalc. mon. 64) を確認する必要がある。タルボットはパドプロス・ケラメウスの校訂版に依拠しているため、ハルキ写本を111番書簡の批判アパラトゥスに含めていない。
- (72) Pachymeres, VIII, 23.
- (73) 本稿においてテオクティストスのアタナシオス伝のイヴィロン写本とバルベリーニ写本の略号にA'とB'を用いているのは、アタナシオス書簡集の写本の略号としてすでに使用されているA (アレクサンドリア写本) とB (ヴァティカン・オットボニ写本) との区別のためである。テオクティストスのアタナシオス伝へのAとBの略号の使用はパドプロス・ケラメウスに由来する。
- (74) *Vita Athanasii*, II.
- (75) この問いに関して、厳密に言えば、テオクティストスがVでもオリジナルでもない、第3の写本的テキストを参照した可能性も考慮する必要があるが、本章の続く議論から彼がVに依拠したことがほぼ明らかとなるため、本文では言及しなかった。
- (76) 同様のことは、キプロスのグリゴリオスの書簡写本に関するラミアの研究からも示唆される。W. Lameere, *op.cit.*, 44-5.
- (77) A'ではなく、a'がオリジナルの書簡にもとづく想定する場合も同様である。写字生の一般的な態度を考慮すると、A'がa'から転写されたときに、省略が多く発生したとは考えにくく、a'の写字生がオリジナルの書簡を写す際にそうしたと考えるほうが自然である。
- (78) *Vita Athanasii*, I, p. 24, ll. 17-27; Patedakis, *Athanasios*, p. 134, n. 35. パテダキスは、テオクティストスがVの各書簡の見出しを記入した可能性を示唆している。Patedakis, *Athanasios*, no. 1, commentary (pp. 164-5).
- (79) A.-M. Talbot, *Faith Healing in Late Byzantium*, 31-8.
- (80) D.G. Tsamis (ed.), *Φιλοθέου Κωνσταντινουπόλεως Κοκκίνου Ἀγιολογικὰ Ἔργα*, vol. 1 (Thessaloniki, 1985), 21-6.
- (81) アトスのイヴィロン修道院にアタナシオス関連の作品群 (書簡集を除く) が保存されているのは、同院の修道士らが、アタナシオスに関心を持ち、コンスタンティノーブルで作成されたテキストを何らかの方法で取り寄せたためであろう。イヴィロンの彼らがアタナシオスの書簡集に関心を寄せたかどうかはわからないが、今日、それがイヴィロンの蔵書に含まれないという事実は、彼らにとってその入手がその他の作品ほど容易ではなかったことを示唆する。アトスには、総主教に就任する前にアタナシオスが隠者として暮らしたと伝えられる洞があり、この洞のそばには、イヴィロン修道院に附属する、聖アタナシオスの小庵 (スキティ) がある。A.-M. Talbot, *Faith Healing in Late Byzantium*, 29-30. アタナシオスはこの洞に、イヴィロンの修道士として暮らしていたのかもしれない。その場合、イヴィロンがアタナシオス関連の作品を多く有する理由が説明できる。アタナシオスのアトスでの生活については別稿を準備中である。2008年3月上旬、筆者は岡山大学の美術史研究者、橋村直樹氏とともにアトスを訪問した。我々は滞在の二日目、イヴィロン修道院のポルフィリオス修道士に案内されてこの小庵を訪れ、そこに単独で暮らすメソディオスという名の老修道士のもてなしを受けた。メソディオスとポルフィリオスの両氏とイヴィロンのその他の修道士の方々、そして、橋村氏に、ここで記して感謝申し上げる。この旅行は、ビザンティン美術のみならず、現代ギリシャ語にも通じる橋村氏の同行と協力により、きわめて有意義なものとなった。
- (82) I. Pérez Martín, *El patriarca Gregorio de Chipre (ca. 1240-1290) y la transmisión de los textos clásicos en Bizancio* (Madrid, 1996).
- (83) ニフォンについては、拙稿「キジコス府主教ニフオンの足跡——アタナシオス時代の修道士主教と地域社会」『歴史研究』(大阪教育大学歴史学研究室) 45号 (2008年)、1-47頁; 「アルセニオス派のシスマ終結の背景について」WIAS DP-2008-006 (September 2008) を参照。
- (84) E. Trapp et al. (eds.), *Prosopographisches Lexikon der Palaiologenzeit* (Vienna, 1976-94) (以下、PLPと略), no. 4271; *ODB*, s.v. 'John XIII Glykys' (A.-M. Talbot).
- (85) グリゴラスを扱った基本的モノグラフは、R. Guiland, *Essai sur Nicéphore Grégoras: l'homme et l'oeuvre* (Paris, 1926). 彼の来歴については同書3-54頁、およびH.-V. Beyer, 'Eine chronologie der Lebensgeschichte des Nikephoros Gregoras', *JÖB* 27 (1978), 127-55 を参照。
- (86) I. Pérez Martín, *op.cit.*, 325-6.
- (87) *Ibid.*, 326-7.
- (88) S.I. Kourousis, 'Ὁ λόγιος οἰκουμηνικὸς πατριάρχης Ἰωάννης ΙΓ' ὁ Γλυκὺς', *Ἐπετηρὶς ἐταιρείας βυζαντινῶν σπουδῶν* 41 (1974), 297-405.
- (89) W. Lameere, *op.cit.*, 48.
- (90) I. Pérez Martín, *op.cit.*, 327.
- (91) グリゴラスが首都を来訪した時期については、諸説ある。シェフチェンコは1311年、1312年、1315/16年の三つの可能性があることを示し、最後の年がもっとも有力であると判断している。その理由としてシェフチェンコが指摘するのは、1315年のヨアニス・グリキスの総主教

- 就任によって、彼とグリゴラスの叔父、ポントイラクリア府主教ヨアニスの間に接点ができ、つまり、それによって府主教ヨアニスが甥のニキフォロスをギリキスに紹介する機会が生じた可能性である。I. Ševčenko, 'Metochites and the intellectual trends of his time', in: P.A. Underwood (ed.), *The Kariye Djami*, vol. 4 (London, 1975), 90-1 (= Appendix 3: When did work on the Chora's restoration begin?). バイヤーは 1311 年の時点でグリゴラスがすでに首都に居住していたと考えている。H.-V. Beyer, *op.cit.*, 130.
- (92) I. Pérez Martín, *op.cit.*, 327-8.
- (93) *Ibid.*, 328.
- (94) V, ff. 97v-99r; Patedakis, *Athanasios*, no. 1; Laurent, *Regestes*, no. 1736.
- (95) I. Pérez Martín, 'El *Vaticanus* gr. 112 y la evolución de la grafía de Jorge Galesiotes', *Scriptorium* 49 (1995), 49; eadem, *op.cit.*, 328.
- (96) Patedakis, *Athanasios*, 135-6.
- (97) I. Pérez Martín, *op.cit.*, 328.
- (98) Cf. J. Darrouzès, *Le registre synodal du patriarcat byzantine au XIV^e siècle* (Paris, 1971). 現在、H・フンガーや O・クレステンらによる、ドイツ語訳を付した新版が刊行中である。この文書集には、アジールを求めた殺人犯を扱う大教会聖職者法廷（エクディキオン）の審議記録は一切含まれていない。R.J. Macrides, 'Killing, asylum, and the law in Byzantium', *Speculum* 63 (1988), 516-7 (拙訳「ビザンツにおける殺人・アジール・法」、服部良久編訳『紛争のなかのヨーロッパ中世』京都大学学術出版会、2006 年、226 頁)。
- (99) グリキスよりも後の総主教がそれを意図した可能性もあるが、記録簿がグリキスの時代の文書から収録されていることは、グリキスが明確な意図を持って、発行する文書の控えを保存していたことを意味する。写本で使用されている透かしもグリキスの意図を裏づけるように思われる。というのも、ウィーン写本の一部フォリオにある王冠型の透かしは、1310 年代にしか使用が確認されないからである。Cf. I. Pérez Martín, *op.cit.*, 328 and 424; V.A. Mošin and S.M. Traljić, *Filigranes des XIII^e et XIV^e siècles*, 2 vols. (Zagreb, 1957), s.v. 'couronne'.
- (100) パテダキスは、VIII と若きアタナシオスが制作した可能性のある別の写本の筆跡の比較から、VIII の写字生はアタナシオスその人であるという、驚くべき仮説を導いている。Patedakis, *Athanasios*, 137-9. 筆者は、パテダキスの仮説は妥当なものであると考えている。拙稿「コンスタンティノープルを遠く離れて」、117-8 頁；「総主教アタナシオスとヴァティカン写本の筆跡——マノリス・パテダキスの新説を吟味する」『オリエン』51 巻 2 号（近刊）を参照。
- (101) このことは、アタナシオス自身がその書簡の中で明示している。Talbot, *The Correspondence*, no. 115; Patedakis, *Athanasios*, no. 15.
- (102) Talbot, *The Correspondence*, no. 1.
- (103) 我々は本章において、いくつかの理由から、A の歴史的コンテクストを論じることを意図的に避けた。主として、A に関する我々の歴史学的あるいは文献学的洞察はいまだ不十分であり、精密な議論を別の場で行うことがふさわしいと思われたためである。
- (104) Talbot, *The Correspondence*, no. 111, commentary (p. 437).
- (105) Cf. Talbot, *The Correspondence*, xxxvi.
- (106) A. Failler, 'La première démission du patriarche Athanase (1293) d'après les documents', *REB* 50 (1992), 137-62. 興味深いことに、V には、1293 年の総主教辞任よりも前に書かれたとわかる書簡は 1 通も含まれていない。これから、辞任以前にアタナシオスが書簡を書いていたのかどうか、そして、書いていたとすれば、それらが V に含まれていないのはなぜか、という二つの問いが提起される。
- (107) Pachymeres, VIII, 23 (p. 191, l. 26).
- (108) Pachymeres, VIII, 23: 'Ἀλλὰ τοῦτο μὲν, κατὰ τὸ εἰκὸς οὐχ ὑπέργραψε, τὸ δὲ γε πρότερον οἰκειοχείρως ὑπεσημήνατο· εἶχε γάρ· « Ἀθανάσιος ἐλέω Θεοῦ ἀρχιεπίσκοπος Κωνσταντινουπόλεως Νέας Ῥώμης καὶ οἰκουμηνικὸς πατριάρχης ». Ἦν δ' ἔτι θερόμενον καὶ ἄλλο τι ἐν τῷ κρυπτῷ γράμματι, ὅπερ οὐκ οἶδα εἰ προσετέθη ὕστερον παρὰ τῶν ἐκείνων προσκειμένων, ὡς· « Κἂν εἴ τι ποιήσω παρὰ ταῦτα, ἄστοργον ἔχω καὶ ἔξω τῆς ἡμετέρας γνώμης, κἂν αὐτὴν ἐγχαράξω μου τὴν παραίτησιν. »'
- (109) Failler, 'La première démission', 144-5.
- (110) この語には中傷者と悪霊の二つの意味がある。
- (111) Pachymeres, IX, 24.
- (112) Pachymeres, VIII, 23 (p. 189, ll. 18-21).
- (113) Talbot, *The Correspondence*, no. 111, ll. 48-54: 'εἶχε δὲ καὶ « Ἀθανάσιος ἐλέω Θεοῦ ἀρχιεπίσκοπος Κωνσταντινουπόλεως Νέας Ῥώμης, καὶ οἰκουμηνικὸς πατριάρχης, ἰνδικτιῶνος ζ' ». εἶχε καὶ μολυβδίην βούλλαν πατριαρχικὴν καὶ κάτωθεν ταῦτα· « τούτοις στοιχῶ ἐνώπιον Θεοῦ καὶ ἀνθρώπων, τούτοις ἐμμένω. εἴ τι δε ἄλλο εἶπω ἢ πράξω ἐκτὸς τῶν ὧδε γεγραμμένων, ἄστοργον ἔχω καὶ βίας καὶ τυραννίδος ἔργον, μὴ συνειδῶς ἑμαυτῷ χάριτι Χριστοῦ ἀργίας τι ἐγκλημα ἰνδικτιῶνος ζ' ης. »'
- (114) Laurent, *Regestes*, no. 1557; Talbot, *The Correspondence*, no. 111, commentary (p. 437).
- (115) Failler, 'La première démission', 154-6.
- (116) *Ibid.*, 156-60.
- (117) Talbot, *The Correspondence*, no. 111, ll. 37-47.
- (118) Talbot, *The Correspondence*, no. 2, l. 39. 同じ箇所、アタナシオスは「ゲンナディオスとセリオートイス、そして同類の輩」にも破門が及ぶと表明している。
- (119) Failler, 'La première démission', 161-2.
- (120) その何者かが続く書簡、とりわけ 112 番を参照したであろうことは、111 番における例外的な二人称代名詞の使用からも裏づけられるように思われる。というのは、宛先が明示されない 111 番に対して、112 番は明らかに主教らを受取人として想定し、二人称表現が多く使用されており、破門状から引用した後、独自の文章を作成する必要に駆られた作者が、真正の辞任状である 112 番を参照し、そこにある二人称表現を自らの文章の中に持ち込んでしまった可能性も多分に考えられるからである。
- (121) Failler, 'La première démission', 161.
- (122) Cf. S. Lampakis, *Γεωργίος Παχυμέρης Πρωτεύδικος καὶ Δικαιοφύλαξ, εἰσαγωγικό δοκίμιο* (Athens, 2004).
- (123) Pachymeres, vol. 1, xxiii-xxxiii; vol. 3, xiv-xx. たとえば、14 世紀に由来する写本は 3 冊しかない。註 35 も参照。

- (124) *PLP*, no. 3528; *ODB*, s.v. ‘Galesiotes, George’ (A.-M. Talbot).
- (125) プロテクディコスの職務については、R. J. Macrides, *op.cit.*, 515 (拙訳、224-5頁) 参照。
- (126) Pachymeres, VIII, 9 (Laurent, *Regestes*, no. 1517: グリゴリオスの辞任状), X, 29 (no. 1583: ヨアニスの辞任状), X, 32 (no. 1585: 皇帝と教会会議へのヨアニスの返書), and XI, 6 (no. 1587: ヨアニスの謝罪状)。
- (127) グリゴリオス以前に在位した総主教は、ミハイル・パレオロゴスの皇帝即位以降の人物に限定して、就任時期の早い順にアルセニオス (二度)、ニキフォロス、ゲルマノス、ヨシフ (二度)、ヨアニス・ベッコスの計5名いる。
- (128) パヒメリスの史書と Si の関係は詳細な検討に値する問題であろう。拙稿「コンスタンティノープルを遠く離れて」、121-3頁を参照。
- (129) Pachymeres, IX, 23.
- (130) Pachymeres, IX, 23.
- (131) Talbot, *The Correspondence*, no. 2, ll. 53-7: ‘ἐθαύμασα δὲ τὴν ἐκ Θεοῦ βασιλείαν σου, πῶς ἑνὸς ἐκείνων φανέντος γράμματος, τὴν ἣν αὐτοὶ ᾤφειλον ζητεῖν λύσιν, εἴπερ ἔμελλε τούτοις περὶ Θεοῦ, αὐτὸς ἐζήτησας παρ’ ἐμοῦ, καὶ ταῦτα γινώσκων, φιλοθεέστατε βασιλεῦ, ὡς οὐδέποτε οὐδεμία συγχώρησις τοῖς διακειμένοις πρὸς τὸ ἀμετανόητον...’
- (132) Talbot, *The Correspondence*, no. 2, ll. 24-32.
- (133) Talbot, *The Correspondence*, no. 2, ll. 20-1: ‘Διὰ ταῦτα κάγω τὸ ἀδίκημα τὸ ἐμὸν τῷ πάπα Θεῷ ἐγγράφως τε καὶ ἀγράφως ἀνήγγειλα...’
- (134) Talbot, *The Correspondence*, no. 2, ll. 33-48.
- (135) Talbot, *The Correspondence*, no. 2, l. 49: ‘Ταῦτα ἐνώπιον τοῦ Θεοῦ ἐποίησα καὶ λόγῳ καὶ γράμματι...’